

ISSN 2189-3268

大学連携会議「学輪 IIDA」

機関誌 「学輪」

第8号 (特別号) 2020

飯田市

大学連携会議「学輪IIDA」

## 機関誌「学輪」

第8号（特別号）2020

- 1 学輪IIDAスペシャルシンポジウムの概要 P.3
- 2 学輪IIDAの取組
- 学輪IIDAスペシャルシンポジウム  
「シリーズ 『いいだの未来デザインを考える』  
～ after/with コロナ時代における地方のパラダイムシフトと創生 ～」の記録
- (1) 第1回「コロナで始まる(変わる)新しい時代を模索する」 P.5
- (2) 第2回「飯田だから実現できる未来戦略 ～つながりと交流の先に～」 P.19
- (3) 第3回「飯田だから実現できる未来戦略  
～持続可能で豊かな地域へのデザイン～」 P.35



## 学輪IIDAスペシャルシンポジウム

### シリーズ 『いいだの未来デザインを考える』

～ after/with コロナ時代における地方のパラダイムシフトと創生 ～

#### 1 開催趣旨

世界中で猛威を振るう新型コロナウイルスにより、経済や政治、社会、文化など様々な分野に深刻な影響を与え、人々の暮らし方（生活様式、働き方、行動、価値観等）にも大きな変化をもたらしている。

渦中にある私たちは、今後の世界や日本、地方社会の変容について、現時点で見通すことが非常に難しい状況にある。

このような中で、大学連携会議「学輪IIDA」の専門性やネットワークを最大限に活かし、コロナ時代のパラダイムシフトをどのように捉え、新たな方向に向かっていくべきか、リニア時代を見据えた飯田の未来について考えるシンポジウムを全3回シリーズで開催した。

併せて、令和2年度が市の総合計画である「いいだ未来デザイン2028」の中期計画を策定していく年にあたる飯田市では、中期計画の取組みの方向性や、地域の将来像を考える上で貴重な提言を得る機会とした。

#### 2 実施概要

- 日 程** 第1回 令和2年8月24日（月）18時30分～20時30分  
配信会場：産業振興と人材育成の拠点「エス・バード」  
第2回 令和2年9月3日（木）18時30分～20時30分  
配信会場：飯田市役所C311～313会議室  
第3回 令和2年9月14日（月）18時30分～20時30分  
配信会場：飯田市役所C311～313会議室

**形 式** オンライン開催（登壇者）  
インターネットを通じたライブ配信（YouTube）  
インターネットを通じた質問募集（sli.do）

**参加者** 市民、学輪IIDAメンバー、市職員等

**参加費** 無料

#### 3 シンポジウム各回における内容

##### 第1回 テーマ「コロナで始まる（変わる）新しい時代を模索する」

パラダイムシフトをどのように捉え、新たな方向に向かっていくべきか。新しい社会像や社会的価値について広く議論する中で飯田の未来について考える。

○議論にあたって 法政大学 名誉教授 石神 隆 氏（学輪IIDAメンバー、いいだ未来デザイン会議委員）

○ディスカッション

コーディネータ	信州大学	特任教授	中嶋 聞多 氏
パネリスト	(株)NTTデータ経営研究所	取締役	唐木 重典 氏
	京都大学大学院	教授	諸富 徹 氏
	ドイツ日本研究所	所 長	Franz Walden Berger 氏
	(公財)南信州・飯田産業センター	専務理事	萩本 範文 氏

## 第2回 テーマ「飯田だから実現できる未来戦略 ～つながりと交流の先に～」

飯田市の総合計画「いいだ未来デザイン2028」では、「飯田の強み」「飯田らしさ」は学び・交流・共感であり、キャッチフレーズを『リニアがもたらす大交流時代に「くらし豊かなまち」をデザインする 合言葉はムトス 誰もが主演 飯田未来舞台』と定めている。

飯田が得意とする交流・繋がりを中心に、人がリアルにつながる事が難しくなり、バーチャルやオンラインなどコミュニケーション手段も多様化する中で、地域の内と外の関係の変化をどのように捉え、コミュニケーションや繋がりを築き交流を深めていくのか。「学び」「交流」「共感」により様々な価値を生み出してきた当地域の取組の今後の方向性について、リニア、三遠南信道時代を見据えて議論したい。

コーディネータ	(一財)日本経済研究所	常務理事	大西 達也 氏 (いいだ未来デザイン会議委員)
パネリスト	愛知大学	教授	戸田 敏行 氏
	金沢工業大学	客員教授	竹内 宏彰 氏
	東京大学大学院	教授	牧野 篤 氏
	和歌山大学	教授	尾久土正己 氏

## 第3回 テーマ「飯田だから実現できる未来戦略 ～持続可能で豊かな地域へのデザイン～」

コロナ以前の日常に戻ることが難しいと言われる中で、新たな時代の変化に対応するだけでなく、これまで飯田が積み重ねてきた人や地域の魅力や強みを見つめ直し、それらを活かしながら、誰もが住み続けたい「くらし豊かなまち」をデザインするために飯田らしい地域づくりについて、様々な視点やヒントを得ながら考えていく機会としたい。

コーディネータ	法政大学	名誉教授	石神 隆 氏 (学輪IIDAメンバー、いいだ未来デザイン会議委員)
パネリスト	立教大学	教授	阿部 治 氏
	法政大学	教授	高柳 俊男 氏
	東京都立大学	教授	大杉 覚 氏
	事業構想大学院大学	教授	渡邊 信彦 氏
	農山漁村文化協会		中田めぐみ 氏
	しんきん南信州地域研究所	主席研究員	竹内 文人 氏

### いいだ未来デザイン会議の議論から

いいだ未来デザイン会議 委員長 下平 勝熙 氏 竜丘地域自治会会長

## 第1回「コロナで始まる(変わる)新しい時代を模索する」

開催日 令和2年8月24日(月) オンライン配信  
配信会場 産業振興と人材育成の拠点「エス・バード」

議論にあたって	法政大学 名誉教授	石神 隆
コーディネーター	信州大学 特任教授	中嶋 聞多
パネリスト	NTTデータ経営研究所 取締役	唐木 重典
	京都大学大学院 教授	諸富 徹
	ドイツ日本研究所 所長	Franz Walden Berger
(公財)南信州・飯田産業センター 専務理事		萩本 範文

### 1. 開会あいさつ

#### ○牧野市長

本日は、いいたの未来デザインを考える学輪IIDAシンポジウムにご参加いただき、あるいはご視聴いただき、誠にありがとうございます。

また、シンポジウムにご登壇をいただきます法政大学名誉教授の石神先生、NTTデータ経営研究所唐木取締役、ドイツ日本研究所ヴァルデンベルガー所長、京都大学大学院の諸富先生、そして南信州・飯田産業センターの萩本専務理事、このシンポジウムをコーディネートしていただきます信州大学教授の中嶋先生、それぞれに大変お忙しい中、ご参加いただきありがとうございます。

さて、世界中で猛威を振るっております新型コロナウイルスにつきましては、当地域におきましてもこれまで6人の感染者の確認をしています。7月28日に6人目の感染確認がありましたが、その後は確認されていない状況です。

経済活動の打撃は、飲食店をはじめ、市民生活に近い業種への影響が大変大きく、市として、これまで緊急対策事業として5月の初めから8月の初めまで、議会の皆様方のご承認をいただく中で、第1弾から第4弾までの対策を打ち出してまいりました。

地域における感染の有無を迅速に判定するための飯田市地域外来・検査センターの立ち上げもその一環でありまして、5月25日に開所し、これまで検査を実施してきております。こうした検査体制をさらに充実させることにより、感染者の接触機会を抑制し、市民の安心・安全につなげていきたいと考えております。

新型コロナウイルスは、経済や政治、社会、文化など様々な分野に影響を与えており、人々の暮らし方にも大きな変化をもたらしていると言えます。今後の日本や地方の社会の変容はおそらく長期にわたるのではないかと、

見方もあるところです。

私たちの地域におきましては、リニア中央新幹線・三遠南信自動車道の開通・全通が間近に迫る中で、アフター・ウィズコロナ時代におけるこの地域のあり方が大きく変わっていくことが予測されます。飯田が持つ真に守り伝えていくべき価値の意義が改めて問われてまいります。こうした大きなうねりを乗り越え、将来にわたってこの地域が住みよい地域であり続けるためには、これまで飯田が積み上げてきたものをしっかりと見つめ直し、地域内外の専門的な知識を交えながら幅広い視点を持って考えていくことが必要となります。

本日は、各分野の第一線でご活躍をされ、そして飯田をよく知っておられます学輪IIDAに参加していただいている先生方とともに、今後のパラダイムシフトをどのようにとらえ、いかに新たな方向に向かっていくべきか、飯田の未来について考える機会として、このシンポジウムを開催させていただきます。

併せて飯田市では、今年度は市の総合計画であります飯田未来デザイン2028の中期計画を策定していく年に当たります。中期計画の取り組みの方向性や地域の将来像を考える上で貴重な提言をしていただけるのではないかと期待をするところです。

大学連携会議「学輪IIDA」は、飯田を起点とした大学・研究者のネットワーク組織として設立されており、ちょうど今年で10年目を迎えているわけではありますが、62大学、139名もの大学・研究者の皆様方に参画をいただいているネットワークです。21世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくりを目指し、大学の研究者同士が交流を深めながら、地域とともにモデル的な研究や取り組みを行っていく、他の地域には見られない試みです。

当シンポジウムも地域が持つ力や可能性を高める学びの

機会として、本日より3回連続のコロナ時代における地方のパラダイムシフトと創生を考えるシリーズとして開催していく予定です。

本日から始まりますこの議論が様々な場で、コロナ時代に向けた当地域のあり方、あるいは未来に向けた取り組みについて議論を深めていただく契機になればということをお願いいたします。私からの開会にあたってのあいさつとさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

## 2. 議論にあたって

### ○司会

本日のテーマは「コロナで始まる(変わる)新しい時代を模索する」になります。シンポジウムを始めるにあたり、議論のきっかけとなるお話を法政大学名誉教授、石神隆先生をお願いいたします。

### ○石神名誉教授(法政大学)

このところこういうオンライン会議が一般化してきており、今日も遠隔から参加させていただきます。技術革新、いわゆるイノベーションは、何かを発明したりすることと同時に急速にこういうものが普及するということが世の中が変わっていくこと、これもイノベーションなのかなと思っています。

考えてみますと、飯田はこれまで常に社会や経済からのいろいろな挑戦を受け、それに対して即座に果敢に対応、いわゆる応戦するというイノベーションの連続であったと思います。例えば、かつての絹の産業の衰退から精密工業への産業の転換、それから大火災や水害からの街や地域の復興、また近年では地球環境の問題を先駆的に対応した環境都市づくり等々、いろいろな世の中の激しい変化に対する応戦の事例のまことに見本の地域であると思います。その果敢な応戦の姿の背景にあるものは、ムトスの精神、新しいものを積極的に取り入れ、自分事としてチャレンジし、未来を切り開いていこうというまさに飯田の心意気かと思っています。

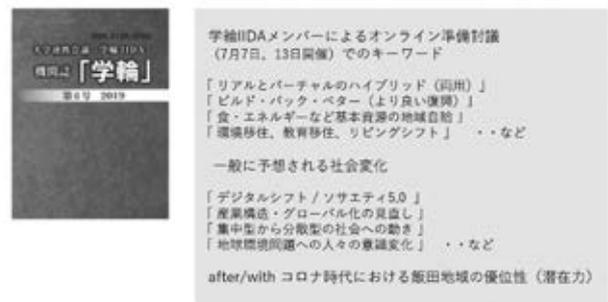


いいだ未来デザイン2028も、まさにムトスの精神で市民と一緒に作り上げられたもので、変えるものと、変えないものを、みんなで議論して、地域経営の基本方向としてまとめられたものです。

絞り込まれた8つのビジョンには、例えば4番目に、学びあいにより生きる力と文化を育むまち、などがありますが、まさに飯田ならではの指向性の盛り込まれているものです。

また、右側に12の基本的な方向性ということで、例えば3番に地育力、それから6番目には市民総健康、それから10番目には低炭素なくらしなど、現在の全国の地方都市をリードする内容で、日々市の各部署あるいは市総体でそれぞれ具体的な目標設定をして進められておられ、また逐次の見直しも行われております。

### after/with コロナ時代におけるパラダイムシフトと地方の創生



一方で、飯田の内在的な力、飯田の持つ力をさらに發揮することを願い、その応援のために、学輪IIDAがいわゆるアカデミックなネットワークとして10年前に設立され、現在60以上の大学の参加するネットワークができています。そこでは飯田への様々な応援や飯田からの発信を試み続けています。

この前、7月に2回にわたり、学輪の先生方がオンラインで集まり、この世界的コロナ禍の事態を乗り越えて、これからの地域また飯田をどの様に考えるべきか、地域のあり方、あるいはビジョンについて議論する会がもたれました。そこでは図の右の方にありますように、多くの前向きなキーワードが出てきて、まさにこれからは本格的な地域・地方の時代だという、ある意味で希望あふれる話がありました。オンラインやテレワークが急速に一般化する中で、飯田の持つリアルな、実物の部分、食や農、空間あるいは空気、水、あるいは循環型のエネルギーなど、人間にとって非常に基本的な部分がこれからはいっそうクローズアップしてくること。また、まさに人の心が大きく変わりつつあるこの現在、よりよい自然や環境、そして教育を求めての移住なども、急速に現実感が増してきているという話がたくさんありました。

コロナ禍がなくてももともと世界的に様々な変革が進みつつあり、例えばデジタル化社会も、これが急速にスピードアップしてきているわけですし、また、何となく他人事であった地球環境問題も、この現在の災禍、あるいは温暖化と関係するとみられる様々な自然災害の中で、多くの人々が改めて自分事として考えてきている、考え始めてい

るように感じます。

その意味で、現在はまさに未来への変革、キーワードにあるビルドバックベター、よりよい復興、創造的な変革への大きなチャンスが来ているように思います。

今日はこれから学輪の先生方による活発な議論や提言が展開されるかと思いますが、飯田の未来を、まさにムトスあふれる精神で一緒に考えていくことができると思います。

### 3. ディスカッション

#### ○中嶋特任教授（信州大学）

このように舞台から拝見しますと、本当にパラパラとした感じで、コロナ時代は、こういうシンポジウムになるということがよくわかりました。それでも、視聴して下さっている方々のなかには、この日を楽しみにされている方もおられますので、精一杯頑張りたいと思います。

ディスカッションは1時間くらいを予定しており、その後、できるだけ多くの時間を会場の皆様、そして視聴されている皆様からのご質問を受けて、こういう時代ですので元気を出して、和気藹々としたシンポジウムになればと思います。ご協力のほどよろしくお願いたします。

さて、まず4人のパネリストの方々から順番にお話をいただきます。トップバッターは、ただ一人会場でご登壇いただいている、地元を一番ご存じの萩本先生、よろしくお願いたします。

#### ○萩本氏（南信州・飯田産業センター 専務理事）

トップバッターを仰せつかりました萩本でございます。地元の間人だということもあってトップバッターにされたのかもわかりません。

私は、産業人ですし、経済人でもあります。地元の間人であり、ほかの先生方とは多少切り口の違う話題をお話します。

コロナ禍でこれからどんなパラダイムシフトが起こってくるのか、人々が健康にそして安心して暮らせる世の中にするにはどうしたらいいのか、あるいはそれを支えるための健全な経済はいかにあるべきか、というようなことを日頃から考えています。またその経済を支えるのは産業です。産業がなければ経済は支えられないわけですから、時代に合わせて新しい産業を興していかなければならないのです。私はかねてより、「産業は回り舞台」と言い続けてまいりました。

2012年の秋に、ウォール・ストリート・ジャーナル紙が、私の話を聞きつけてニューヨークから取材に来られて新聞記事になりました。ちょうど安倍第2次内閣の誕生したそのときだったと思います。それまで政治は不安定でしたし、経済は依然として出口の見えないトンネルの中でありました。私は、経済は良いときもあれば悪いときもある、これ

は必ず繰り返し、産業もまた回り舞台のように変化すると思っていました。安倍内閣は大胆な金融政策で景気浮揚を図るとともに政治の安定化が図られました。それがアベノミクスとなり、以来今年の春まで戦後2番目と言われるような好景気が続きました。しかし、今年初めコロナという新型ウイルスのためにアベノミクスはとうとう終わりを遂げて、今度はリーマン・ショックを超えるような大不況に突入したとされています。まさに経済の循環であり、産業の回り舞台が急旋回を始めたのです。

かつてこの地方は、蚕糸産業が基盤を成し長く続けました。それが昭和初期の大恐慌で行き詰まり、戦争も始まっていよいよ新しい産業へ踏み出さざるを得なくなりました。戦後の精密機械産業へとつながったわけですが、それが長野県の基盤産業になり、この地域を今日まで支えることになりました。

しかし、その舞台にもいつか回るときがくる。次の産業を用意すべきだと私は考えていました。そして私には古くから縁のありました航空機産業がそれにふさわしいのではないかと思うようになりました。それはまた国にとっても同じ事情で重要なことでした。かつて日本を支えた繊維産業、造船、家電、情報、多くの産業が、次々と韓国、台湾へ、そして中国へと移っていきました。気がついてみたら、自動車産業だけが一本足でこの国の経済を支えているという状況になったのです。国の産業政策として、航空機産業の育成を取り上げざるを得なくなったわけで、2015年に経済産業省は、産業構造審議会に委ねて国の航空産業ビジョンづくりをいたしました。そのとき縁があり、私は委員として審議会のプログラムづくりに参加しました。そして、これはチャンスと思い、そのテーマを長野県に持ち帰り、航空機の装備品を長野県の産業に育てようと提案し、航空機産業クラスターを飯田に創ることになりました。これが今、まさに皆さんのいるエス・バードへとつながってまいりました。

産業を育てようと考えましても、実はそう簡単な作業ではありませんでした。しかし幸いなことにこの長野県には前例があります。上田に県の蚕糸試験場と信州大学の繊維学部をつくり、人材を育てて技術を開発し、県内の至る所にそれを普及し産業にしました。またその後、その産業が衰退し次の産業が必要になったとき、今度は岡谷に県の精密工業試験場をつくり、精密機械事業に携わる企業を誘致して県内一円に精密機械産業を普及いたしました。

私は、アメリカのシリコンバレーに半導体や情報産業のクラスターができあがったように、クラスターをつくり、研究開発と人材育成から始めないと本物の産業は育たないと思っています。

確かに、コロナ禍で時代は大きく変化し、コロナ後に何が起こるかはわかりません。しかし、人々の生活を支える

ため、この時代における技術、産業は必ず必要となるし、またそれを育てないと人間は生きてはいけません。そのとき大切なことは、やはりクラスターをつくって取り組むことだと思っています。その固い塊さえできれば、求心力が生まれ、次第に若者が集まり、知恵の輪が大きくなり強くなってさらに求心力がついて、人材育成と産業振興は自立的に成長を始めるものと思っています。

昨年からエス・バードの信州大学から航空エンジニアが誕生し、航空産業界へと巣立っていきました。まだまだ柔らかくて壊れそうなクラスターですが、これを固く強くすることが私たちに与えられた使命と思っています。

コロナ禍で本当に航空産業は大きな影響を受けています。今、世の中は出歩くことを制限し、感染防止に躍起になっていますが、人間は、出会い触れあうことで、文化が生まれ、文明が生まれました。例え技術が発達し、通信手段が会話や情報交換を便利にしたとしても、それはコミュニケーションのほんの一部だと思います。手をつなぎ、肌を触れあい、仕草や目の動きから相手の感情を読み取る興味深い会話が人間の中にはあります。人間の感情のやりとりはそう簡単には新しい技術で私は置き換わることはないと思っています。

一方で、既に人類は地球上の隅々まで知り尽くすことができ、世界中の至るところの人々とのふれあいを求めています。それは止めようもなく、ますます拡散していきたく思います。そうなれば、移動手段は絶対に必要なものですし、形はどうであれ進化していくものと思っています。もちろん、近距離の自動車、電車、そして海をまたぐ移動で使用する船や飛行機、いろいろな手段が増えていくと思います。すべてが省エネであり環境に優しい技術に裏付けられなければならないと思います。そうした改良技術は必要です。必要であるがゆえに産業の生まれる所以になり、これは縮むことなく今後も大きくなっていくと思っています。むしろ、人間の根本的、根源的な要求の中に次の技術の芽があるのだと思っています。情報技術ばかりが今日注目されますが、そればかりではないテーマはたくさんあると認識し、私はあえて、そして改めて日本工業の復活を祈念したいと思います。

#### ○中嶋特任教授（信州大学）

萩本先生、ありがとうございました。

皆さん、いかがでしたか。私の場合は、「産業は廻り舞台」そして「クラスター」というのはやり言葉が耳に残りました。ご承知かと思いますが、クラスターは葡萄の房をイメージし、感染者の連鎖のことも言いますが、この場合は「産業クラスター」、つまり様々な産業の集まりであって、ここエス・バードはもとより、航空機産業を次世代の飯田の中心産業に据えていこうという、常々萩本さんがおっしゃっていることとして理解しました。

さて、この点につきまして、バネリストの皆様の方からご意見がございましたらお手を挙げていただければと思います。

#### ○唐木氏（NTTデータ経営研究所 取締役）

萩本さん、ありがとうございました。いつも力強いお話ありがとうございます。

航空機産業は、「移動」という人間にとって必要な手段を扱う領域なので、コロナ禍を乗り越えてまた蘇ると思っています。ところで、工業の振興、あるいは技術の発展という視点でお尋ねします。この分野に関して、産業として利益構造に変えていくという意味でいうと、技術そのものの価値に加えて、さらに優位性を保つために、例えば特許を含む知的財産権を確保することにより、結果として技術を守っていくということ、それを付加価値にしていくことも同時に必要ではないかと思うのですが、どのようにお考えでしょうか。

#### ○萩本氏（南信州・飯田産業センター 専務理事）

それはとても大事な視点だと思います。ただ、産業技術には発展過程があって、新しい技術というのはアメリカを起点にして進化してきたという経過がありますので、その中で日本の立ち位置が今どこにあるのかよく見て、その立ち位置の中で、私たちはどの産業がふさわしいのか、日本で取り組んでふさわしいものになるか、考えながらテーマ選びをしないといけないと思っています。

#### ○諸富教授（京都大学大学院）

日本の今までの製造業の強みの神髄を伺った気がいたしました。

実はこの1月に岩波書店から「資本主義の新しい形」というタイトルの本を出版しましたが、資本主義の発展過程をたどると、今、ご指摘いただいた製造業のサービス化という方向にやはり向かっています。それを裏付ける統計データについては、その本に掲載しておきましたので、興味ある方は参照いただきたいのですが、より大きな付加価値、より大きな利益を、やはりサービスによって獲得する経済に徐々に移行しつつあります。日本が強みを生かしながら、収益を獲得できる産業へ向かっていけるかが課題だと思っています。

#### ○中嶋特任教授（信州大学）

ものづくりのサービス化というのは、具体的にどういう感じのものをイメージしておられますか。

#### ○諸富教授（京都大学大学院）

典型的な自動車産業の、これからのいく末というものに非常に関心を持っております。

自動車というのは、鉄の塊であり、移動手段ですが、一方で、これから自動運転が入り、電動化していくということになります。おそらく部品点数は相当減っていく、それから自動制御されることになると、人間が運転しなくてよ

くなります。そうすると、自動車の中の空間、移動空間というものが単なる移動手段ではなく、運転の手が空くわけですから様々なサービス提供が可能になってきます。地図情報や道路情報が事前に獲得されて、分析されて自動走行に活用できるようになると、それに基づいて様々なサービス提供が可能になります。また、外部から音楽・映像などのデジタル・コンテンツをサービスとして提供することも可能になります。つまり、自動車産業というもののサービス化により、自動車はサービスから大きな価値を引き出すことができる媒体になっていきます。トヨタが新しいコンセプトカーを出しているのも、実は自動車を媒体にサービス提供して、そのサービスから収益を得るようなビジネスモデルをまさに模索をされているからだと思います。あのトヨタの社長が、「トヨタもサービス産業にならなければいけない」と言うのは、まさにこの点に関わってのことだと思っております。

#### ○萩本氏（南信州・飯田産業センター 専務理事）

製造業は、戦後、高度成長の時代には付加価値があって発展しました。当時の製造業の付加価値は、消費地に認められる価値と、生産地の環境に依存する価値との格差、これが製造業の付加価値を生む要因でした。ですから、常に安くできるところで作り、その価値が認められる地域で消費する、その差額が製造業を支えてきました。

ところが段々とその地域格差が少なくなってきました。結局日本で作ったのではあわないから、安いところ安いところへと生産地が移っていきましたが、この先どこまで行けるのか、これが製造業の難しいところです。

トヨタの例が出ましたが、トヨタも日本で作って日本から送るスキームが、段々と現地化していき、最後は究極の現地化で、輸送費をなくして消費地で生産をする以外に付加価値の取りようがないというところまできました。更に今なぜトヨタが付加価値をサービスの方に転換していくのか、製造そのものでは付加価値が得られにくくなり、この先は車づくりというハードからモビリティというソフトの事業、更には街づくりに付加価値があるのではなかと模索している。

ただ、私たちとしては、ものをつくることにもう一段の工夫し、新しい付加価値をその中から見つけたい、今回答があるわけではないが、それがこれから極めて重要になると思っています。いわゆるハードの付加価値とソフトの付加価値を切り分けし、皆でその収益を分配していく、これがとても大事なテーマではないかと思っています。

#### ○中嶋特任教授（信州大学）

なるほど、ありがとうございました。

今の点も踏まえて、時間があれば後ほど議論をもう少し深めてみたいと思います。

それでは、唐木先生、続いてよろしく申し上げます。

#### ○唐木氏（NTTデータ経営研究所 取締役）

飯田の皆さんにはいつも大変お世話になります。これまで何度もお邪魔していますが、いつも温かく迎えていただいております。

今日の議論ですが、今日はまず新型コロナウイルスの影響を受けた社会がこれからどう変化するかを考えるということだと捉えています。広い観点からの考察だと思いますが、最終的にはこれを飯田の中でどのように結実していくかということにつながると期待しています。そういう意味で、飯田は変化を前向きに捉えることのできる土地です。コミュニティの強さがありますし、ムトスの精神ですよ。実践力みたいなものがありますし、何よりもコンテンツリソース、素材がありますよね。いろいろな文化的要素、人的資源などを有し、新しい時代を担っていくにはふさわしい土地柄だと思いますので、その視点で今日はお話ししたいと思っています。

まず、新型コロナウイルスの社会的影響について申し上げると、やっぱり世の中の構造的変化というのが起きてきていると思います。私どもの会社はリサーチやシンクタンク、各種コンサルティングを手掛けていますが、最近、「働き方改革」と「テレワーク」というテーマで社会の状況を調査しました。すると、やっぱりかなり大きく変化してきています。これはいろいろな新聞にも取り上げられました。例えば「働き方改革」については、数年前だと、取り組んでいる会社は20%程度だったものが、もう半分以上になってきました。特に今回の新型コロナウイルスによって仕事の進め方を否応なしに変えざるを得なくなり、いろいろな人たちが今までのやり方ではうまくいかないというか、逆にいうと、今までとは違う形でないと事業が上手く回らないということに気づき、取り組みを始めたという側面が見られます。

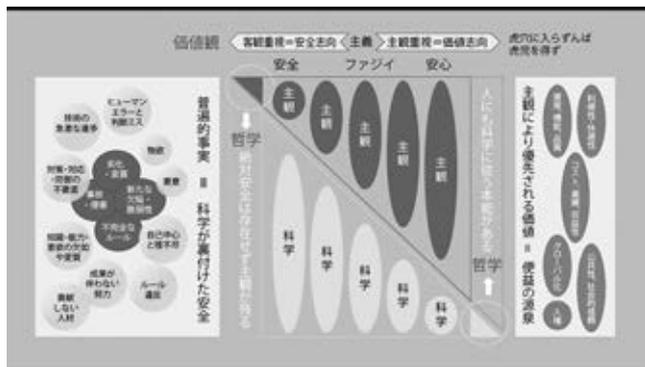
実際にはいろいろなことを変革していかななくてはいけないのですが、例えば「デジタル化」への対応ということが一つあります。うっかりすると「デジタル化」というと、「コンピュータで何でも処理すればいい」と短絡的にとらえられる向きがありますが、決してそうではないと思います。先ほど萩本さんがおっしゃったように、デジタル技術で絶対代替できないものはあります。フェイストゥフェイスの価値はもちろん、人間同士がやらないといけないものがある。むしろ、それを補完するという意味でデジタル化をうまく活用するということであり、つまりバランスを取ることが大事だと思います。

一例を申し上げますと、今回の自粛のなかでしばらく学校に行けなかったことで、子どもたちの教育レベルが下がるとはという危惧が話題になりました。東京のある地域で実際に英語のレベルテストをやってみたらかなり点数が下がってしまったそうです。家に閉じこもって学校にも行

けないし塾にも行けない、英語を勉強できないから下がってしまったということのようです。逆に、別のある地域では、オンライン教育を使って英語の勉強機会を子どもたちに提供したそうです。せっかく家にいるのだから勉強しようじゃないかと地域を挙げて取り組んだところ、ぐっと実力が上がったということです。つまりデジタルの力という可能性を上手く活用すれば、時間とか空間を乗り越えて、いろんなことができます。東京にいないとできないということはないのです。各地域でいろいろな取り組みができることがあると思います。

ですから結局は使い次第です。教育以外にも医療などもそうですよね。国も規制緩和をして、少しずつリモート診療ができるようになってきました。また、文化面では、様々な文化遺産をどう次世代につなぐかも大切な課題です。デジタル技術を活用してアーカイブなどにより、未来に残していくこともできるかと思っています。今こそ思いきって投資をして、この地域はそういうことに積極的に取り組んでいるとアピールすることが、その地域の魅力になるのではないかと思います。ただ、投資には当然ながらお金がいりますので、それについては上手く民間活用するべきだと思います。時間があればあとでまた述べたいと思います。

一方で、地域にとって大事なことは安全と安心であると思っています。今回のパンデミックもそうですが、皆さんが不安になったときに、一番に自分の身を安全にしたい、家族を守りたいと思うわけです。医療の世界では薬や防疫体制であったり、災害であれば防災の仕組みであったりと、どちらかというハード面、物理的な力によって守っていくという側面があります。しかし、人間というのは、客観的な事実だけではなく主観的な感じ方というものがあり、いくら形が揃っていても安心できないという場合があります。今回のパンデミックも、おそらく治療薬の開発が進んできても、本当に自分にとって危険が払しょくされたと感じ、満足だというレベルまでいかないと安心しきれないと思います。この安全と安心をどのようにバランス良く保持するかが地域づくりにとって重要だと思います。



実はこの絵が、安全と安心の違いというのを私どもの会社の研究会でまとめたものですが、科学的なものは、この

図の左の方になります。科学の力で解明できるものはほとんど解明した方がいいですよ。でも一方で、主観的なもので安心感をもたないといけないところもあると思います。その実現には、いくつかあると思います。それは例えば制度を変えること、技術を整えること、それからいかに信頼できる人がきちんと伝えるかということもあるでしょう。その他の一つとして、安心のためのデジタル活用もあるかもしれないですね。

ご存じの方も多いと思いますが、今回のパンデミックで、台湾でIT技術が大変効果的に活用されたと言われてます。台湾のIT担当大臣のオードリー・タンさんという方は、言ってみればITのオタクですよ。この方が大臣になって、マスクを品不足にならないようにうまく行き渡るように、国民のIDと上手く結びつけた仕組みをたった数日間で作り上げたと言われてます。それによって混乱もなく公平にマスクが国民の手に渡りました。これには世界各国が注目しています。技術政策として大変優れた一例だと考えますが、日本でもこの技術がないわけでもないのです。ただ同じようにすぐにできないのは、例えば日本のマイナンバー制度がまだそれに対応していないという事実もありますが、もっと言うと、政治的に実績のない人をいきなり大臣にするような風土が日本にはないのではないかとということもあるかもしれません。仕組みを変える際に、文化的な素地みたいなことがボトルネックになることはまます。

言いたいのは、思い切った人材活用の重要性です。できる人を思いきって大胆に使っていくということ、例えば地域レベルでやっていくということも重要だと思います。きっと飯田市はそういう意味で多才な人材が多いので、そのような人たちの力を活用していくことは大変重要であると思うところです。

最後に、私が思うのは、サステイナブルなまちづくり、これも飯田市が常にもう既にやっておられますが、これを持続的に維持するためには、お金を回す、経済を回す仕組みが必要です。例えば事業運営に民間の力をもっと取り入れることです。実は私どもの会社でもこれを実現するモデルとして、行政予算に頼りすぎず、民間の資金を導入する仕組みを今一生懸命考えています。海外では、ヨーロッパなどで結構実現しているものなのですが、飯田で思い切って他の地域に先駆けて、経済と行政と地域の文化の育成を上手く回せるような仕組みを構築できないかと思っています。

いずれにしても、今回の社会情勢において皆さん苦勞をされて悩みも多いでしょうが、このピンチをいかにチャンスに変えられるかが、今後の社会の中で組織として、あるいは地域として生き残れるかどうかの分かれ目じゃないかなと思っていますので、ぜひ、飯田の皆さんと一緒にそう

いう新しい課題について考えていきたいと思っています。

○中嶋特任教授（信州大学）

唐木先生、ありがとうございます。

唐木先生はITの専門家でもいらっしゃるの、ぜひほかのパネリストの方、あるいは会場、視聴者の方も結構です、ご質問等ございましたら、いかがでしょうか。

個人的に私は、科学と主観の綱引きのような図を見て大変興味をもちました。

次にお話しいただくヴァルデンベルガー先生、ドイツと日本は比較的コロナ対策に成功していると言われていますが、ドイツに学ぶべき点も多いと思います。確かメルケル首相って物理学者でしたよね。つまり、非常にロジカルに物事を考えながら政策を進められているのかなという印象を持ちます。何を申し上げたいかというと、科学的な思考が、政治や未来デザインという場面でも相当必要ではないかということです。唐木先生が強調されていたのは、狭い意味のITではなく、ITを非常に幅広く捉えて、その社会的インパクトについてロジカルに言及されていたように感じました。追加で唐木先生、何かコメントがあれば、いかがでしょうか。

○唐木氏（NTTデータ経営研究所 取締役）

おっしゃるとおりで、「デジタル化」＝「IT化」（コンピュータ技術導入）と捉えがちですが、デジタルの本来の意味は数値化、数量化ですね。もっというと「見える化」だと思います。今、何が起きているかということをもとに因数分解して、それをそれぞれの要素ごとに考えることをもっとやっていけばいい。そのためにはデジタル技術の利用が有用だと思います。例えば地域で高齢化という社会課題を考えるときに、なんとなく若い人が減って大変だという漠然とした議論ではなく、それは移動手段の問題なのか、医療の問題なのか、それとも産業構造の問題なのかみたい、やっぱり因数分解をしたうえで、それぞれについて現状把握と要因分析を進めるというようなことが大事です。それが言ってみればデジタル的な問題解決の方向性じゃないのかなというふうに思います。

○中嶋特任教授（信州大学）

ありがとうございます。会場からご質問ありますか。

○吉川議員（飯田市議会）

飯田市議会の吉川と申します。

最近テレビを観ていると、何でもテレワークやITでできる話がされていますが、やはり顔と顔を合わせて話することで気持ちがつながる、いろいろなことが進むという先生方のお話は非常に響きました。

お聞きしたいのは、航空産業について、大いに期待してジェット機の話をしていましたが、なんかつまづいた、未だに飛び立たないような気がして、つまづいたといっても、非常にこけそうになるくらいつまづいている気

がします。これからどうなるのか、コロナの影響で、産業クラスターの形成もちょっと遅くなっていく気がするわけで、その辺をもう少し詳しくお聞きしたいと思います。

○中嶋特任教授（信州大学）

その点につきましては、4人のパネリストの方の話が終わってから、戻ってディスカッションしたいと思います。

それでは、ヴァルデンベルガー先生お待たせしました。よろしくお祈りします。

○ヴァルデンベルガー氏（ドイツ日本研究所 所長）

皆さん、こんばんは。私は経済学者として、日本経済を20年以上ドイツと比較しながら研究してきました、その視点から今日のテーマについて話したいと思います。

先ほども中嶋先生の指摘がありましたように、コロナ感染症の対応について、ドイツと日本は他の国々と比較しますと、最初の波に割合に上手く対応ができたという話があります。ドイツは第1の波があって、日本も第1の波があって、スケールはちょっと違いますが、ドイツの感染者数は今ちょうど多分日本と同じくらいですが、しかし人口が日本の方が多いため、人口のわりに日本の現在感染者数の割合はドイツより低いです。しかし、いろいろ違いがありますが、回復率と死亡率を比較しますと、やはりそこで両国でも成功したという結果が見えます。主な違いは、ドイツは医療制度の面でパンデミックの前でもよく整備ができて、特に集中治療室の数とか人当たりの数は、日本の何倍もあり、あまり医療制度の崩壊にならなかったんですね。日本は一時期危機感がありました。PCR検査については、ドイツは積極的に検査を進めていますが、日本は比較的消極的なこともあり、今でもドイツのPCR検査数の1割程度ではないかと思っています。また、緊急措置のあり方ですが、日本は法律上の壁もあり強制的な緊急措置がとれず市民の協力が必要ですが、ドイツは法律上、強制力を持つ緊急措置を執りました。

これからの一番、一つのもちろん直接的な影響は多分利用制度の再評価だと思います。ある程度パンデミックに次のパンデミックもあると考えられますし、すぐスムーズに対応できるようなキャパシティを維持しなければならないという意識が日本でも多分強くなると思います。特に集中治療室ですね。そういう制度の整備への影響があると思います。

あと明らかになったのは、沖縄で観光客があふれたときに病院での対応ができなくなりましたが、医療制度における地域格差で、ドイツより日本の地域格差の方が大きいということです。IT、デジタル化における遠隔治療、テレメディスムの可能性について、日本はなかなか進めませんでした、コロナの影響で規制の壁が崩れ、遠隔治療など地域医療における格差の改善にもつながれると思います。

それともう一つ、これが一番期待されていますが、デジ

タルトランスフォーメーションが大都会と地方に新しい関係や役割分担をもたらすことです。デジタルトランスフォーメーションは今のパンデミックによって加速させられました。デジタルトランスフォーメーションによって仮想空間が提供されます。仮想空間の中でいろいろ活動できるようになります。仮想空間では地理的距離という意味がなくなります。今日のシンポジウムもそうですが、どこにいてもどこからでも、インターネットが繋がれば参加できます。そしてどこからでも世界への発信可能になります。移動しなくても様々なサービスを受けられるし、様々なサービスを提供できるということです。

教育の分野についても、私は大学でも授業がありますが、東京に来ない学生、仙台とか北海道から参加した学生も何人かいます。後期も同じようにオンライン授業がメインになるので、別に東京に来なくても東京の大学の授業が受けられるという形になります。

仕事はテレワークとかホームオフィスで、文化活動も世界へアピール、発信できることを飯田市で考えると、人形劇など様々な飯田における活動も世界へ発信できるという可能性があります。国際交流にも新しいチャンスができました。その仮想空間のポテンシャルをどこまで実現できるかは、やはり既に社会の実際の人間関係、実際に人と会って実際に会って話すという点がどこまで重要であるのか。日本の場合は人間関係をすごく重視している社会であるので、どこまで仮想空間で人との付き合いを実現できるかは少し疑問もっています。仕事の職場もそうで、働き方はやはりオフィスで仕事するときはいろいろ情報交換できますし、特に日本の場合は働き方がジョブ型ではないため、いろいろ相談が必要になるので、そこでやはりテレワークとかホームオフィスで仕事するときは、少し問題が起きると思います。日本もそうですし特に飯田もそうだと思いますが、デジタルトランスフォーメーションにおける新しい仕事の可能性とか、新しい教育の可能性とか、やはりそういう人間関係の構築とか働き方のあり方を変えない限り、多分フルポテンシャルで利用できないと思います。もちろん地方にとっては一番重要なのは、若者たちの大都会への流出への対応だと考えます。これは教育機関とか東京とか関西など大都会に集中しているのですので、そういう将来のキャリアのためには一時的に大都会へ行かなければなりません。そして地方へ戻れるかどうか、もちろん職場も大都会の方がありますので、戻れない場合がほとんどです。この大都会への流出を、デジタルトランスフォーメーションの中でブレーキをかけられるか大きな課題になると思います。この場であまり詳しくお話しできませんが、非常に重要な課題だと思います。

最後に、今のコロナのパンデミックの中でも、地方自治体の積極的な取り組みは本当に成功のキーであったと思

います。それは日本でもドイツでもほかの国でもその様です。しかし、地方自治体が積極的な対応・対策をとれるために、そのための必要な資源をきちんと確保できるため、やはり中央政府の役割は重要であると思います。

大雑把な話になったかもしれませんが、私の話は以上です。

ありがとうございます。

#### ○中嶋特任教授（信州大学）

ヴァルデンベルガー先生ありがとうございます。おかげさまで大変、話が広がった感じがいたしますが、限られた時間ですので、この点について、まず唐木先生、ITの側面、デジタルトランスフォーメーションという話がございました。デジタルトランスフォーメーションって最近よく略されてDX、DXと言っていますが、DXがビジネスや社会に与える影響は非常に大きい。でも、その反面、これまで私たちが築き上げてきたノンデジタルな世界も残しつつ、むしろ新しい融合の形がこれからの時代になっていくことが言われていますが、今のヴァルデンベルガー先生の話に対して、ぜひコメントをいただきたいと思います。

#### ○唐木氏（NTTデータ経営研究所 取締役）

ヴァルデンベルガー先生、ありがとうございます。大変、共感を覚えました。

特に日本の働き方を変えないまま、新しいデジタル技術を導入しても、日本の労働市場では確におっしゃるようにジョブ型が進んでいない、言い換えると、チームワークで仕事することが前提になっている社会の中で、スタイルを変えないと難しいだろうと思うところもあります。

実際に私どもの会社でもテレワークをかなり行っていますが、会社に全く来ないで全くほかの人に会わないために、ちょっと精神的に閉塞感に陥っている若い社員が結構いるのです。今、彼らをどうケアするかが私の仕事の一つですが、いくら便利だからといっても、人間同士のアナログなコミュニケーションがなくなってしまうと、おそらくは偏った社会になると思います。ですから、考え方を変わると、デジタル技術は本当に効率性というか、それをやることによって、別になんら問題のないところで手間やコストや危険性を削減していけばいいのであって、結果として有益な時間を生み出すことがむしろ重要であると思います。そして生み出した時間をフェイストゥフェイスのコミュニケーションに充てたり、文化の創造に充てたり、新しい取り組みに何か新しいことにチャレンジする時間に充てることによって、より人間らしい生活を送ることが本意です。技術を導入することが目的、手段が目的化しないよう注意し、実際に豊かな社会をつくるための1つのツールにすることが大事だと私は考えます。対立構造のように考えない方がいいと思っています。

### ○ヴァルデンベルガー氏（ドイツ日本研究所 所長）

全くそうですね。やはり仕事関係が、テレワークとかホームオフィスで、またジョブ型の仕事の働き方が導入されることによって、仕事や職場の人間関係の重要性が少し減れば、コミュニティとか家族とか他のところの人間関係をつくれるようになりますね。そのバランスが重要です。今の日本の仕事のあり方、人間関係は、会社の組織に集中してしまいますので、それはもうデジタルトランスフォーメーションによって、そういうもうちょっと幅広く人間関係を自分の精神のバランスのためにも広げられる可能性があります。

### ○中嶋特任教授（信州大学）

こうした遠隔会議も結構、登壇者や視聴されている方々にストレスがたまりますよね。大学の授業でも、学生が解っているのか、いないのかがよくわからない。でもとにかく、おとなしく聞いてくれるんです。これがもう大変なストレスになります(笑)。そういった意味でコミュニケーション手段として新しい形でしょうが、欠点もたくさんある気がいたします。

それでは、最後に諸富先生、よろしく願いいたします。

### ○諸富教授（京都大学大学院）

今回、パンデミックというものとデジタル化というものがかなり相伴いながら進行していることは、先生方がご指摘のとおりだというふうに思います。私の基本的な考えは、少し先ほど萩本さんへのコメントを求められてお話をした通りです。資本主義の新しい形といいますか、資本主義の変わりゆく姿に非常に関心がありまして、実はデジタル化ということで今議論されていることの前に、資本主義そのものが長い時間をかけて相当変化をしてくれているのではないかと、デジタル化はその潮流の一端ですし、飯田市もまた、その波をかぶっていくことになります。

その前に飯田市との関わりに触れつつ、少し自己紹介させていただきますと、私自身は飯田との関わりはここ10年位の話ですが、環境政策や再生可能エネルギー促進政策の側面から、研究者として飯田市を応援させていただいております。元々は、飯田には調査のために訪れたのが最初だと思いますが、いろいろな縁がありまして、行政における再生可能エネルギー政策関連のお手伝いしてまいりました。条例づくりとか、それから再生可能エネルギー導入支援審査会、これは牧野市長からも辞令をいただきまして、その会長を務めさせていただいておりますし、それから(株)おひさま進歩エネルギーがつくっている学校、教育機関(飯田自然エネルギー大学校)があり、その学長も僭越ながら務めさせていただいております。

飯田を環境とエネルギーの面から見てきた立場から、また研究者としては、公民館制度に非常に関心を持っており、飯田が伝統的に培ってきた、地域のまとまりをつくってい

く、あるいは人材を育成して輩出をしていく、ある種の教育学習システムとしても公民館制度が機能している様は大変興味深く、その研究・調査もしてまいりました。そういう視点から見まして、資本主義が変化をしていく新しい波に対して、飯田市は十分に変化に対応していく潜在能力を数多く持っている。そういう意味では対応能力に優れたまちであると見ております。

では一体どのような変化が起きてきたのか、既に1970年代ぐらいからはっきりしてきたのは、いわゆる知識社会というものに移行しつつあるということです。知識が非常に重要な資本になりつつあるということが、既に1970年代からも言われ始めました。これまでは工場というのが、経済学でいうと資本ですね、キャピタルと呼ばれるものを用いて、工場をいかに大規模化して大量生産を行い、安いコストで製品を作って売るかということで製造業では勝負がついたわけです。ところが1970年代頃からそれだけではなくて、知識、先ほど知的財産の話も出ていましたが、知識資本と呼ばれるものの重要性が急速に認識されるようになってきたわけです。これは萩本さんのお話にもありましたように、付加価値を何で出していくかとの争い、争いと言ったらちょっと語弊がありますが、ということ考えたときに、やっぱり知識、無形資産という新しいタイプの資本、それが非常に重要になってきた。無形資産というのは、知的財産をその中にももちろん含んでおります。それから、人的資本、人間ですね。人間も資本であると。それから人間が持っている知識、知識のストック、それから実は組織とか社会関係、「社会関係資本」という言葉遣いも経済学ではしますが、これら新しいタイプの非物質的な要素が、実は付加価値の創出に非常に重要な影響をもたらしているということがわかってきました。これが実は、産業構造の大きな変化につながってきたわけです。

私たちは「サービス業」というと、レストランや介護サービスなど、対面であるいは対人サービスをすぐ思い浮かべますが、それだけではなくて、知的財産権をそのベースにした非対面／非対人型の知的サービスの提供も十分にサービス業といえます。

デジタル化の非常に大事な点は、そういったサービスというものを対面・対人だけでなく、遠隔で世界中の消費者に対してオンラインで届けることが可能になってきたということです。こうしたことが相まって、もちろん製造業ものづくりを通じて価値をつくりだしますが、非物質的な価値、無形資産をベースに、必ずしもものづくりではない形でも価値は作り出されるようになり、むしろそちらの方が大きくなっていくという現象が、1990年代以降より鮮明になってきました。そこにデジタル化という新しい技術が全面化しだし、スマホが普及したことによって、いわゆるGAF Aをはじめとする、2000年代以降に新しく生まれて

きた企業群が、国境を越えて海外からでも直接日本の顧客に対してダイレクトにアクセスをして、ビジネスもできるようになってきた。象徴的なのは、彼らは必ずしもモノをつくらずに、いわゆるプラットフォームというものをつくります。例えば、Airbnb(エアビーアンドビー)という企業は、ホテルを全く造らないのですが、ホテルよりも安く泊まれる場所を探しているバックパッカーの若い人たちが一方にいて、他方で、子どもたちが成人になり家から出て行き部屋が空いている。その部屋を何らかの形で貸し出し追加的な所得を得たいと思っている人たちや、海外の方々と交流するのがすごく楽しいという人たちがサイドビジネスとして民泊をやりたいという人々がいる、こういった両方のニーズをプラットフォーム上で結びつけていくマッチングビジネスをやっている、これがピーアンドビーですよ。これは一切ホテルをというものを造らないで非常に高収益を上げている。つまり、モノづくりを一切することなく、大きな収益を上げるプラットフォームビジネスというものが台頭してきた。こうした産業構造の変化が起きたことで、グローバルないわゆる株式時価総額で見た場合のトップ企業の顔ぶれは、1990年の時点ではアメリカでもグローバルでも製造業がずっと並んでいました。それが現在はすっかり変わってしまい、製造業はもう下の方にいて、いわゆるGAF Aをはじめとするデジタル企業がトップを占めるようになってきた。それくらい産業構造の姿がすっかり変わってきたということです。

というわけで、飯田市が今後どの方向に進むか、将来の産業のあり方に対して、どのように立ち位置を決めていくかが、大きく問われていくと思っています。

今後このパンデミックあるいはコロナの影響としては、このように起きてきた資本主義の流れを一挙に加速するのではないかと思います。コロナ禍は、これまでなら5年あるいは10年かけて進むだろうとみられていた変化を、一挙に数カ月に圧縮して実現してしまったという側面があります。ただし、これは技術が既にあったということが非常に大きな点で、パンデミックは革命ではなく、つまり新しいものを生み出すわけではなく、既に起きていた技術変化を加速させるという点に非常に大きな力があると思います。

日本の今後の産業の姿、私がずっと見ている限りでは、おそらく鉄鋼業をはじめとする素材産業はおそらく衰退過程に入っていくのではないかと思います。他方、ものづくりでいうと、その一段の高度化を図っていく萩本さんの方向は尊敬すべき、さらに競争優位を持てる点で、これは一つのセオリーだと確かに思っています。

一方で、私自身の主張は、どうやってこれまでの日本の製造業の強みを生かしながらそれをデジタルと結びつけていくか、製造業のサービス化をどうやって推し進めていくか、そうした段階にどうやって移行していくかという点に

あります。そのためにはおそらく人的資本、人を育てるといふこと。それから組織に投資して、新しい知の創出を目指していく、創造的なものを生み出していく、ということが必要になります。それを考えた場合に、飯田というエリアは既にそういう基盤が整っていると私は思います。公民館という仕組みが、すばらしいそういう人、組織をつくり上げる母体なわけですよ。それから、飯田の皆様が非常に注力をしてきた学輪IIDAのような形で、知を飯田の地に集積させる仕組みがあります。こういった基盤が既にある。それをどうやって新しい時代の要請に応じて人材育成やトレーニングの仕組みにさらにブラッシュアップしていくのかが、次の時代の課題になると思っています。

デジタル化投資が必要なのは多くの方々ご指摘のとおりですが、新型のコロナ時代の社会的投資は、やはり知識基盤、人材に投資をしていくことを要請しており、今後の産業構造の変化というものを、その行く先を見据えながら、着実に実行していかなければならないと思います。その中にやはりデザイン構想力のある人材というものをどうやって集積させるか、飯田生え抜きの人材も大事ですが、飯田という地域に魅力を感じて非常に多くの人々がこの飯田エリアと往來することを可能にするようなネットワークづくり、そういった環境整備というものが非常に大事です。デジタル化は、それ自体は新しいものをつくり出さないかもしれないですが、ヴァルデンベルガー先生がおっしゃったように、距離の壁をなくしてくれる非常に重要なツールでもあります。ですので、そういう意味が非常にあるのと、それからやはり今回のパンデミックの非常に大きな影響として、必ずしも都心になくても大丈夫じゃないかと考え出した若い起業家たちが結構いるというわけです。その人たちが別に東京にいないでもいいや、大阪にいないでもいいやと思ったときに、もっと別の地域でもっと自然環境に恵まれた、あるいはもっと濃い人間関係の中で、あるいは地域課題を掘り下げる中で新しい事業の芽を見つけたいと思った、そういう若い人たちが、魅力を感じて飯田の地域に来てくれる。そういう起業家たちを呼び込むための投資をなんとかできないか、と思います。

そういう意味では、例えば私が関わってきた環境エネルギーは飯田における非常に大きな強みですし、(株)おひさま進歩エネルギーといった、それこそベンチャー企業がありますし、ここにくるとそういうビジネスをやりたいというときに一つの基盤がありますよと、多くの刺激を受けられますよという意味で、萩本さんの目指されているクラスターも一つですし、あるいは別のクラスターをつくって、若い人が魅力を感じて飯田に流れ込んでくるような、そういう仕掛け、仕組みづくりをされていく方向も非常に期待したいところであります。

以上、私の話であります。ありがとうございました。

○中嶋特任教授（信州大学）

諸富先生、ありがとうございます。

何か諸富先生に対してパネリストの方々から、ご質問・ご意見はありますか。

○萩本氏（南信州・飯田産業センター 専務理事）

時間がだいぶ押していますので、お答えの方はまた後でゆっくりということで、問題提起だけさせていただきます。このデジタル化は、技術の二極化を起こすのではないか、あるいは富の偏在を起こすのではないか、あるいは人口密度による地域間格差を起こすのではないかということを変に心配しています。

それは、デジタル化は大変に希望のある視点であると同時に、田舎と東京の圧倒的な人口密度の違いが格差の要因になる。人間と人間の触れあう機会が多いところで知識は高揚され、そして新しい技術が生まれてくると思っており、このデジタル化で地域が生きていくために、どの様にすればいいのかはいささか疑問に感じていまして、また機会がありましたら解説いただけたらと思います。

○諸富教授（京都大学大学院）

デジタル化ないしは資本主義の非物質化と私が呼んでいる現象が、格差を生み出しやすいということは確かだと思います。おそらく二極化が進んでいく可能性は出てくる。製造業が、これまで地方においても非常に広範な雇用をもった分厚い中間層をつくり出されてきたものとは、やはりちょっと違うと思います。ただ私は必然性論がちょっと強すぎるのかもしれませんが、しかし、やはりデジタル化を含めた資本主義の非物質化の流れに噛んでいかなければ、産業がさらなる発展を遂げるのは難しいのではないかと。製造業をさらに萩本さんの方向で極めていくのも一つですが、他方で、何度か申しましたように、サービス化あるいはデジタル化の方に、サービス産業、製造業のサービス化を図っていかないと、富の創出もできないのではないかとともに思います。

なかなか厳しい道ですが、そこを議論していくとどうしても出てくる格差に対してどう対処するか、別の話をしていかなければなりません、だからといって新しい動きを止めるということにはならない、ということだけお答えをさせていただきます。

○萩本氏（南信州・飯田産業センター 専務理事）

ありがとうございます。

あえて申しますと、デジタル化といいますが、今のIT産業は田舎にあっても、ホームオフィスとか、サテライトオフィスで十分に仕事はできると言われるのですが、実際は地方に分散して働く労働者と、東京の真ん中で仕事している労働者との間の格差は、確実に広がっているように私は思います。すなわち地方に分散した技術屋の皆さんから「我々は所詮近代的なIT土方だ、知恵の部分、その中核の

部分は大都会で握っていて、我々はそのソフトをひたすら夜中までかけて書いて納品することが仕事化されていて、中核的な技術には入れない」とのぼやきを聞いていますので、ちょっとお話をしておきたいと思います。

○中嶋特任教授（信州大学）

面白い論点だと思います。

○ヴァルデンベルガー氏（ドイツ日本研究所 所長）

今、非常に面白い話があって、ドイツの事例を挙げますと、ドイツの唯一なIT会社サップ（SAP）の本社は田舎です。大都会じゃないです。ハイデルベルクの近くの田舎にあります。今、萩本先生がおっしゃったのは日本の実態で、大都会に集まらないと何もできない状況ですが、ドイツを見るとそういうわけではない。日本の特徴かもしれません。

○中嶋特任教授（信州大学）

おっしゃるとおり、こういう中央集権というか東京一極集中になったのは明治以降ですから、まだまだ長い歴史からみれば新しい話ですね。ドイツのように地方自治体力が持つような分散型の社会の中で、今のお話のように企業もまた本社があちこちに分散していることも多々あると聞いております。ありがとうございます。

それでは、会場そして視聴者の皆様からのご質問の時間を取りたいと思います。

まず、先ほど会場からご質問について萩本さんの方からお答えいただきます。ただし、この第1回シンポジウムは飯田に限って話をしております。タイトルが「コロナで始まる新しい時代を模索する」ということで、非常に大きな視点で議論をお願いしています。第2回、第3回で飯田の具体的な話へと段々絞られていくような形になると聞いています。その意味で、先ほどの問題提起、ご質問に対してもう少し視点を上げて、個々の問題というより、航空産業あるいはクラスター化ということに対して、進展を早める手立てという観点から、お答えを手短にお願いします。

○萩本氏（南信州・飯田産業センター 専務理事）

手短というのが大変に難しく、航空産業はつまずいたのではとおっしゃいますが、私は、全くそうは思っていない。産業論をこの短時間で評価するのは非常に難しいと思いますが、航空機の需要は、先ほどもお話ししたように必ず帰ってきます。時間軸を変えればこれは何ら問題ないし、逆に今落ちているということはチャンスだと思います。この産業に関して言えば、日本の技術は周回遅れです。その周回遅れの技術をキャッチアップするのに最高のタイミングをもらったとは思っているところです。例えば、ボーイング747という飛行機は1950年代に開発をして、現在、日本の所有機は消えましたが、既に70年以上経っても、まだ生産をしています。すなわちそれだけ時間の長い産業であるということをおっしゃりたいのだと思います。

一方で、皆さんの身近な話題を提供したいのですが、電

話機の発展を皆さんはどう評価されるのでしょうか。かつて置き電話しかなかった時代から今はスマホになりました。極めて短時間に新しい技術が生まれ、古い技術はどんどん捨てられていきました。これもまた産業の一つです。この飯田に相応しい産業を考えたら、あまりにもめまぐるしく変わる産業は合わないと思います。緩やかに流れる、時間軸の長い地域には厳しい産業だと思います。逆に長い時間を掛けてゆったりと流れる産業こそ、この地域にはふさわしいのではないかと思います。そういう意味で航空機産業には、確かに高いハードルはありますが、これをコロナの影響だといって私は逃げるつもりはありません。ここを克服し、長い取り組みをしていくことによって、長く生き残れる産業がこの地域で生まれるのではないかと考えています。

#### ○中嶋特任教授（信州大学）

ありがとうございます。

#### ○司会

ライブ配信をごらんいただいている方からいくつか質問が来ております。

先ほどの唐木先生のご発表の中で、行政、民間との資金を循環させることを考えている、そのような方法があるというご発言がありましたが、ヨーロッパで進んでいるという方法について、具体的にどうイメージしたらいいのかという質問です。

#### ○唐木氏（NTTデータ経営研究所 取締役）

これは、新しい事業モデルの創出を目指し既にある地域で実証実験的に進めています。今までは地域で新しい社会事業を興すときに、例えば自治体の資金、いわゆる公的なお金でおこなっていることが多かったと思われませんが、これからの財政を考えると限界があるかと思えます。そこで民間資金を地域に入れていく仕組みを、地域の金融機関と一緒に考えています。例えば、このエリアで言うと、飯田信用金庫のような金融機関と一緒に、地域の事業開発をしていくというイメージです。わかりやすくいうと、一種の成功報酬型のモデルですね。出資を受けた機関が行政に代わっていろいろな社会サービスを提供し、それを客観的に評価して、その成果に応じて成功報酬を受け取るというスキームです。結果として総トータルコストを下げていくという仕組みです。実際にはいろいろ難しい部分もありますが、民間の力を使って少しずつその地域の社会運営コストを下げつつ、なおかつ大事なことは、そこに事業者が発生するということです。その事業が地域で持続することで地域経済の活性化につながります。一方金融機関からすると、融資先の開拓にも苦労されている中で、新しい指標で企業を評価していくというチャレンジになります。そのために、例えばSDGsのようなものに取り組んでいる企業の価値を評価基準として指標化できないかと考えてい

ます。これまでは財務諸表でのみ評価していた企業の価値を、それだけではない非財務の指標の中で評価して、そこでレーティングをしながら融資をしていく仕組みを上手くつくれば、地域金融機関にとっても新しい融資先ができるし、地域の経済も回るようになるのではないかと目論んでいます。なかなか簡単ではないと思いますが、実際に海外では成功している事例もたくさんありますので、このような事例をぜひ日本の中でもいざれ実現したいと考えています。飯田でも取り組んでいけたらいいなと思っているところです。

#### ○司会

続いての質問は、パラダイムシフトのイメージがなんとなく持ててきたが、デジタル化が急速に進む一方で、変えずに守っていくもの、今の状態を保っていくべきこと、守っていくべきことは何でしょうか。企業や行政は、どのくらい先を見て進んでいったらいいのでしょうか。

#### ○中嶋特任教授（信州大学）

パネリストの方、今の質問に対してどなたかいかがでしょうか。

では、会場にいらっしゃいます牧野市長、社会あるいは地方自治体の話もでておりましたので、ここまでの議論に対して、少しコメントいただいてよろしいでしょうか。

#### ○牧野市長

今日は、新しい時代を模索するというテーマですので、それぞれの先生方から頂いたお話は、まさに新しい時代を予感する、これからくる時代を感じるものだったと思います。

ただ、これからの方向性についてまとまっているわけではないと思っています。特にデジタル化については、これがどのような方向に行くのか、まだ本当に模索しているところだと思います。行政でもデジタル・ガバメントという話がありますが、今までずっとアナログの世界でやってきた人間関係の構築は、ウェブ会議や分散作業の様な形を通して、どこまで変化していくのか。まさに働き方改革が出てくればいいのですが、まだそこまではいかない部分もあります。

デジタル化については、中央政府と地方自治体でネットワークが必ずしもつながっているわけではありません。例えば、国土交通省への三遠南信自動車道の整備促進のお願いですが、これまでは、私たちのような市町村長や議員の皆さん方等で中央省庁に行き、要望活動をすることが当たり前でした。まさにアナログの世界です。それが新型コロナによってできなくなったとき、今日みたいに画面を通じてお願いする話になるかといったらそうはなっていない。なぜか。ネットが繋がっていないからです。そこでどうするのかという、地方自治体の職員がパソコンやタブレットを中央省庁まで持っていき、局長や課長の前にそれを置

き、そこに首長たちの顔が映るようにしてお願いできるようにする。要望が終わるとそのパソコンを他の局長・課長のところへ持っていきまたお願いをする。はっきり言って漫画ですよ。本来のデジタル化とは少し違う、なんちゃってデジタル化みたいな話も実際は起こっています。本当に必要なデジタル化を進めて、本日の議論のように効率化により生まれた時間を有意義に使うところまでもっていかなければいけないと思いますが、そこまで行くには行政として改革することがたくさんあると思っています。

#### ○中嶋特任教授（信州大学）

残すべきものと変えていくものというお話がございました。これに確たる回答はないと思いますが、私個人は、地域の文化、これだけは残していきたい、さらに文化に基づく様々な広がりやをぜひ次世代、次々世代へとサステイナブルにつないでいくべきだと思います。ただ、これをお考えになられるのは、いいだ未来デザイン会議の皆様だと思いますので、皆様方への宿題とさせていただくということでしょうか。

それでは、パネリストの方々から最後のコメントをいただきたいと思います。

#### ○諸富教授（京都大学大学院）

大変貴重な機会をいただきまして、ありがとうございます。

結局、最後の質問にも関係しますが、何を変えないかという点に対する普遍的な答えはやっぱりないです。これは中嶋先生がおっしゃったとおりで、それぞれの地域に固有性があって、伝統があって、受け継いできたものがあるわけですから、それをやっぱり自分たちで改めて評価をして、何を変えずに受け継いでいくかを考えていくことは非常に大事で、そういう意味で飯田の良いものを、これは変えるべきではないということをもまず考える。その上で何を新しいものとして付け加えていくかを、ぜひ議論していただきたいなと思います。

#### ○唐木氏（NTTデータ経営研究所 取締役）

私も同じく思います。実際にリアルでやらないとわからないことがあると思います、特に経験値みたいなものはいくらデジタルで表そうと思っても難しいですし、擬似的に表示したとしても本当の意味で実感が持てないと思うんです。個人の経験もそうですし集団体験はさらにそうですね。例えば地域やグループで同時に体験したことの価値が、実はものすごく大きいと思います。これは後から知識や情報を継ぎ足して組み合わせれば再現できるというのではなく、同じ時間、同じ場所、同じ意識で体験した一体感は容易には複製できないですし、その価値は極めて重要だと思います。ですから、その価値を維持したり伝達したりするためのツールとして、例えばどうしても全員集まれないときの補完策のような形でデジタル技術の活用をすればいい

いのです。使い方を上手くこなしながら自身の生活に生かすということが重要だと思います。

#### ○ヴァルデンベルガー氏（ドイツ日本研究所 所長）

ありがとうございます。

話の中でもやはり今コロナとデジタルトランスフォーメーション、非常に短期的な危機と長期的な挑戦、今、一緒になってそこでやはりこれからどうになる。生き方とか働き方とか人間関係について、本当に考えられる機会を与えられている一方で、今の世界の動きはすごくスピードが速いので、その時間を本当にもらえるか、考える時間が本当にあるのか心配です。その心配もやはりどう解決するか、大きな課題だと思います。

#### ○萩本氏（南信州・飯田産業センター 専務理事）

冒頭の話の中で、私は、人間は出会い触れあうことで文化が生まれ、そして文明が生まれてきた、そういうものを排除するような流れは非常に問題だと警告したつもりですが、中嶋先生から地域の文化を守るべきだというお話が最後にありました。実はお祭りもやめる、踊りもやめる。今全てやめてしまうということで、これが2年も3年も休むとなると、ほとんど継承すら難しくなっていくと思います。それくらい、文化から文明まで壊され始めているということを深刻に考えるべきだし、デジタルだけが論議の中心になっているように思うのですが、先ほども申しましたように、知識の二極化あるいは富の二極化あるいは地域間格差が、明らかに大きくなってきているように感じています。では、こうした田舎まちはどう生きていったらいいのか、デジタルだけでは残念ながら生きにくい世界だと思います。だから私は、工場というリアルな現場があって、みんなと一緒に働ける職場を維持していくことが、とても大事ではないかなということをも改めて感じました。

#### ○中嶋特任教授（信州大学）

これから第2回、第3回のシンポジウムへ繋げていく意味もありますので、最後に石神先生からコメントをいただければと思います。

#### ○石神名誉教授（法政大学）

冒頭に申しあげましたように、学輪IIDAの先生に集まっていたいて、オンラインで議論し、ずいぶん盛り上がりました。なぜ盛り上がったのか、やはり、参加の先生方が1回リアルつまり現地を経験しているからです。今日もそうですが、まさにこれからはハイブリッドだと思います。リアルとバーチャルの両方の良さを上手く使いこなしていく時代かと思います。

今日の集まりの中でも、飯田の未来デザインで残すものと変えていくもの、残すべきものという議論が随分されました。残すものは、たくさんあります。ビジョンにありました8つのまちの姿ですと、人と人のつながり、地域で子どもたちを育てることとか、さらに飯田の中での集中と分

散、多様性、などがあるわけです。20地区それぞれ個性と  
いいますか、固有の文化があるし、それから小学校一つに  
しても、児童数10人から1,000人までの学校があり、飯田  
の貴重な多様性の文化であるという議論がありました。残  
すものは本当にたくさんあって、これをもう一回探ってみ  
る一つの機会になっていると思います。

世の中バーチャルでものごとを行っている、かえって、  
人に会うとすごく新鮮です。ある意味で非常にうれしいわ  
けです。やはり人間本来の姿だと思いますが、そういうも  
のが改めて認識されている。今、そういう時なのかなと思  
うわけです。

今日は、いろいろ本当に興味深い、非常に本質的な、あ  
るいは飯田の未来を考える非常にベーシックで基礎的なお  
話をいただきました。クラスターの話、デジタル化社会、  
デジタルトランスフォーメーション、それから自治体の役  
割あるいは資本主義の変化、知識基盤の話、人材の話等々、  
本当に貴重なお話があったかと思えます。先ほど中嶋先生  
からもお話がありましたように、今日はどちらかというと、  
基盤といいますか、いろいろ考える基礎の部分をご議論い  
ただくシンポジウムだったと思います。次回は、飯田だけ  
から実現できる未来戦略として、どちらかというと具体的  
なあるいは固有名詞的なものがたくさん出てくる議論に進  
んでいくと思います。今日のお話を基盤にさらに面白い展開  
になっていくものと思います。

いずれにしても、大事なものは、地域の免疫力とい  
いますか、地域の回復力、レジリエンスという言葉があり  
ますが、地域がいかに変化に対応していくか。コロナ禍は一  
過性ではなく常に起こると考えると、戦時・平時でいうと  
戦時が続くという感じになってくると、まさに変化の時代  
にどのように対応していくか、それを常に考える必要があ  
るわけです。飯田は歴史的に本当に上手く変化への対応を  
やってきたと冒頭に申し上げましたが、これは飯田に一つ  
の情報力というものがあったからだと思えます。その情報  
力は中馬の時代から、それから文七元結の水引を日本中に  
売り歩いた、そういう中から情報が集まってきた。人形劇  
もそうですよね。飯田にいろいろな劇人が来てそれで情報  
をもたらしたという、そういう中で、飯田は情報を非常に  
積極的に吸収してそれを醸成したといえますか、醸し出し  
て、独自の飯田文化をつくってきたという伝統と歴史ある  
地域だと思えます。そういう意味で、飯田にはこの、免疫  
力、回復力が非常に強く存在しているのではないかと考  
えます。このことはどこの地域でも考えていること、狙っ  
ていることです。そう思うと飯田がこれからこのポストコ  
ロナ、アフターコロナあるいはウィズコロナにどう対応し  
ていくかは、飯田だけの話ではなくて、全国の一つの見本  
になるような、そういう飯田はミッションを持っている地  
域と思うわけです。このパネルディスカッションは非常に

重要な意味を持つと思われしますので、これからまたしっ  
かり続けていけたらよいと思います。

#### ○中嶋特任教授（信州大学）

ありがとうございました。

皆さんマスクをされているので、ここから見て笑ってい  
るのか、いないのかわからないですが、ぜひ、未来を考  
えるときは楽しくワクワクするような話で、ときにはユーモ  
アを交えて考えていただかないと良いアイデアは絶対出な  
いと思っています。今日のこのパネルディスカッションが  
少しでも飯田の皆様のお役に立てばと思います。

ご清聴、本当にありがとうございました。

#### 4. 閉会あいさつ

##### ○牧野市長

それぞれの先生方におかれましては、本当に有意義な議  
論をいただきまして、誠にありがとうございました。

先ほどから出ておりますように、こうした議論がかなり  
突っ込んだ形でできますのも、それぞれの先生方がこの飯  
田を訪れていただいております、飯田の価値というものをそ  
れぞれの立場から共有していただいている、その賜物と思  
うところであります。やはりリアルの人間関係、結びつき、  
飯田の言葉で言えば「結いの力」があってこそ、このよう  
ないろいろな観点からの議論も深まっていくということ  
を改めて思ったところです。

先ほど申し上げたように、無理矢理デジタル化してこう  
した人間関係をつくろうとしても、おそらく上手くいかな  
いと思っていますので、むしろこのような皆さん方との  
ネットワークを大事にしながらそれを広げていく、まさに  
飯田の結いの力で人間関係を広げていく中で、新しい時代  
の模索をしていくことができると改めて思ったところで  
ございます。

レジリエンスという言葉も出ましたが、ぜひ、これか  
ら皆さん方との関係を大事しながら、今後のパラダイムシ  
フトに対応できる、適応力のある飯田にしていくことが  
できればと思っています。

どうかこれからもご指導ご鞭撻のほどをよろしく願  
いいたします。

本日は誠にありがとうございました。

## 第2回「飯田だから実現できる未来戦略 ～つながりと交流の先に～」

開催日 令和2年9月3日(木) オンライン配信  
配信会場 飯田市役所C311～313会議室

コーディネーター  
パネリスト

(一財)日本経済研究所 常務理事  
愛知大学 教授  
金沢工業大学 客員教授  
東京大学大学院 教授  
和歌山大学 教授

大西 達也  
戸田 敏行  
竹内 宏彰  
牧野 篤  
尾久土正己

### 1. 開会あいさつ

#### ○牧野市長

本日は、皆様お忙しい中、いいだの未来デザインを考える学輪IIDAシンポジウムにご参加、ご視聴いただき、誠にありがとうございます。

シンポジウムにご登壇いただく愛知大学 戸田先生、金沢工業大学 竹内先生、東京大学大学院 牧野先生、和歌山大学 尾久土先生、このシンポジウムをコーディネートしていただきます日本経済研究所 常務理事 大西様、本日は大変お世話になりますが、よろしく願い申し上げます。

さて、当シンポジウムは、今年で設立10年目を迎える、大学連携会議「学輪IIDA」のスペシャルシンポジウムとして、3回シリーズで企画されたものになります。今回は第2回の位置づけになります。新型コロナウイルスは世界的に人々の暮らしに大きな影響を与えており、社会に大きな変化をもたらしています。コロナ時代におけるこの地域のあり方も大きく変わっていくことが予測されますが、こうした大きなうねりを乗り越え、将来にわたってこの地域が住みよい地域であり続けるためには、飯田がこれまで積み上げてきたものをしっかりと見つめ直し、地域外の専門的な知識を交えながら、幅広い視点をもって今後のことを考えていくことが必要とらえているところです。このため、各分野でご活躍され学輪IIDAのメンバーで飯田をよく知っていただいております先生方とともに、このパラダイムシフトをどのようにとらえ、新たな方向に向かっていくべきなのか、飯田の未来についてご議論をいただく機会を設けさせていただきました。

8月24日の第1回シンポジウムにおきましては、コロナ時代の新しい社会像や社会的価値につきまして、デジタル社会の進展や資本主義の変化、地域産業における価値づくり、知識基盤のあり方や行政の役割など幅広い視点からご

議論をいただきました。パラダイムシフトの読み取り方の示唆をいただいたと思っております。変容する時代の中で当地域といたしましては、守るべきもの、変えていくべきものにつきまして、議論の種を蒔き、変化への対応力を高めていくことが必要と感じているところであります。

本日のシンポジウムでは、学びと交流によりまして様々な価値を生み出してきた当地域の取り組みの今後の方向性につきまして、コミュニケーションのあり方や相互理解の手法の変化など、地域の内と外の関係の変化をどのようにとらえていくのか、リニア・三遠南信濃時代を見据えた議論ができればと思っております。

新型コロナウイルスの感染につきまして、当地域におきましても7月28日に6人目の感染者の確認がされたところではありますが、その後は新たな感染者は確認されておりません。

経済活動の打撃は飲食店をはじめ、市民生活に近い業種への影響が大きく、市ではこれまでに緊急対策事業として第1弾から第4弾までの対策を行ってきました。今後もさらなる取り組みについて検討を続けてまいります。

感染予防と経済再生の両立は大変難しい課題ではありますが、検査態勢の強化を図りますとともに、今後も各地区のまちづくり委員会や各種団体の皆さん方から幅広く実情やご意見を伺いながら、市民の皆さん方の命と生活を守る対策を適時的確に講じてまいります。

今後の日本社会あるいは地方社会の変容は長期にわたるとの見方もあり、飯田が持つ真に守り伝えていくべき価値の意義が問われることになると捉えております。

このシンポジウムの議論が様々な場でコロナ時代に向けた飯田のあり方やその未来に向けた取り組みについて議論を深める契機になりますよう、そして今年度策定いたします「いいだ未来デザイン2028」の中期計画における取り組

みの方向性や当地域の将来像を考える上での貴重な提言となりますよう、期待を込めまして私からのあいさつとさせていただきます。

## 2. ディスカッション

### ○大西氏（一財）日本経済研究所 常務理事）

本日はどうぞよろしくお願いたします。8月24日に開催されました1回目のシンポジウムは、私はリアルタイムでは視聴はできず、後日、YouTubeで拝見しました。当日の機会を逃しても、後日追っかけて見ることのできる非常に便利な世の中になりました。本日のシンポジウムも録画されているので、終わった後、自分で見直すのもひとつの楽しみかとも思っております。

第1回は、法政大学の石神先生が議論を提起された後、信州大学の中嶋先生がコーディネーターを務められて、パネリストがNTTデータ経営研究所の唐木取締役、京都大学の諸富先生、ドイツ日本研究所のヴァルデンベルガー所長、それから地元の南信州・飯田産業センターの萩本専務理事といったメンバーでディスカッションが行われました。

重要なキーワードが出ていましたので、ご紹介しますと、まず、萩本専務からは、地元ではほぼ名言にもなっていますが「産業は回り舞台」、人間が出会うことで文化が生まれ、人間の根源的なニーズから次の産業の芽が生まれることをご提言いただいております。

NTTデータ経営研究所の唐木取締役からは、テレワークやワーケーションといった様々なことがオンラインでも可能な世の中にはなったが、必ずしも万能ではないこと、この時代の流れに追いついていくためには新たな投資が必要であり、公共だけでは対応できないので、民間の力をどのように活用していくかが課題であることをご指摘いただいております。また、台湾では“オタク”とも呼ばれるような特定分野に秀でた人材を大臣に登用して上手くいったというお話もご紹介いただきました。はたして、そんなことが飯田でもできるのかということですが、この点についても、後ほど皆さんと議論していきたいと思っております。

ヴァルデンベルガー所長からは、日本とドイツのコロナ禍における対策の違いに加えて、デジタルトランスフォーメーションについて、仮想空間と地理的な距離の関係を飯田がどのようにとらえていくかといった問題提起がなされています。また、ドイツで一番有名なIT企業は、実は地方都市に本社があることも指摘されています。

京都大学の諸富先生からは、資本主義の形が変容していく中で、飯田がどのように対応すべきかについて問題提起がありました。

最後に、石神先生からは、コロナ禍の時代には地域の免疫力こそが、地域間競争を左右するといったお話をいただいております。飯田は、昔から交通の結節点であったこ

とから様々な情報が行き来しており、それらを上手くとらえて自らの力に変えてきたという歴史があることもご指摘をいただいております。

以上が前回の振り返りです。第2回を開催するにあたって、一点、石神先生から宿題をいただいております。それは、前回はどちらかというと総論としてこれからの飯田が進むべき方向性など大きな話を議論していただきましたが、今回は、できるだけ具体的な内容、例えば、固有名詞が飛び交うような場にするようにアドバイスいただいております。本日ご登壇の先生方には、長年それぞれのご専門分野で飯田に関わっていらっしゃるのと、今回のパネルディスカッションを視聴されている方も、おそらく飯田市民の方あるいは飯田ゆかりの方が多いと思っておりますので、できる限り固有名詞を出した議論をしていきたいと思っております。

本日のキーワードは、コロナ禍で、コロナショック、ウイズコロナ、ポストコロナ、いろいろな言い方がされていますが、足下で大きく世の中変わってきています。加えて、飯田の場合には、来るべき環境変化としてリニアの開業があります。これらの2つの変化（足下の変化、来るべき変化）を踏まえて、飯田が「守るべきもの」と「変えるべきもの」を大きなテーマとして掲げて、話を進めていきたいと思っております。論点は3つ用意しています。

1つ目が、飯田がこれまで得意としてきた域外とのつながりについて、2つ目が、飯田の特長であり公民館活動などの域内での取り組みです。特に域内での飯田の取り組みを全国各地の先生方が学びに来られているのですから、これについて、守るべきもの、変えるべきものを議論したいと思っております。

3つ目は、今回のパネルディスカッションの題目である「飯田だから実現できる未来戦略」について、未来に向けて我々がどのように行動していくのか、ということで、域外、域内、そして未来という順番で話を進めていきたいと思っております。

では、最初の論点である域外とのつながりについて、戸田先生からお願いします。

### ○戸田教授（愛知大学）

先ほどご紹介いただきましたように、私は長らく三遠南信地域をフィールドにしており、飯田は半分地元という感じですが。専門が国土計画ですので、やや広い空間を対象にします。絵をお見せして、飯田がこれまでやってきたこと、さらに進めるべきこととで、現在感じていることをお話ししたいと思います。

第1回のシンポジウムでは、様々な社会構造変化のお話が出てまいりました。国土計画的にこれをどうとらえるかということですが、この図にはコロナで明確になった変化を示しています。現在の大学の講義は対面とオンラインで右往左往していますが、これも前々からわかっていたこと

で、むしろコロナで露わになったと捉えるのが良いと思います。

現在はソサエティ 5.0とされています。これは日本政府の主張ですが、社会・国土構造の変化の流れが、狩猟採集社会の時代から農耕、工業、情報社会、そしてソサエティ 5.0という、バーチャル的なものと目に見える体感的が融合するような形の社会を目指していくことに移る。これが否応なく入ってくるという感じがいたします。

国土構造的にいうと、狩猟採集時代から分散していたものが、工業も分散していますが、情報社会は国内でいうと東京に集中してきました。しかしこの形だけでは持続できないのだと思います。

分散を行うための情報ツールも出てきており、対流的分散と書きましたが、かつてのように個別の分散ではなく、つながること、この両機能を持つような分散を国土の構造として選び取っていくこととなります。これまでは様々な状況に追われて変化してきたところですが、これからはむしろ選び取っていくということが重要だと思います。

一方で、コミュニケーションも変わってくるということで、対面、ウェブとありますが、今大学はこの2つのワードで右往左往していますのでこの用語を使っています。対面的なものが続いてきて、情報化でウェブ、バーチャルなものも入ってきました。ただ縁で見ると、もともとは地縁、空間がつながっているところから、だんだん社縁の形になり、さらに対面的なものウェブ的なものの融合に向かうこととなります。そのあり方は、個々が今やっているところだと思います。そこでは知縁、知ろうとすること、あるいは知恵、こういう縁が非常に重要になってくると思います。

ソサエティ 5.0の図は、7月29日にアメリカの下院で、GAFAといわれるGoogleをはじめとする4つの大企業を集めて独禁法に関する委員会をもちました。個別の企業ではこれまでもありましたが、国家やその連携とITプラットフォームがぶつかる状況が出てきていると思います。この様にデジタル化の実態も全般的には、非常に不安定な要素があると思います。感染症でも不安定、経済でも不安定、元々自然災害は不安定、その中で国内での充実を図らねばならない。私は生きていける空間単位、生きていく空間単位、これを求めることだと思っています。小さなエリアから、もっと大きなエリアから、こういう挑戦が非常に重要になっていると思います。



さて、その大きな単位としてリニア中央新幹線プラス三遠南信自動車道を、スーパー・メガリージョンの中に置いてみる。大きなインフラは刻々と動いているわけですが、全部つながるまで実態がわかりにくいということがあります。しかし、構図としてこういう形もっている。これを非常に大きな生きていく単位と捉えられ、むしろ地域が作り込んでいくべきだと感じています。

この中で一番大きな変革になるのが飯田、これは構図的に見ると間違いないです。現在のところ途切れている骨格に新しい線が出て変わっていく。全体の変化を含み込んで変わっていく圏域だと思います。そういう意味で、国土の中での飯田の打ち出しというのが、もっと強くあってよい。これはどこから見てもそう感じます。



三遠南信のエリアは国土の中で珍しく、首都圏、東京大都市圏と名古屋大都市圏、2つの大都市圏の中に挟まれる境界領域的なところ。そこにいろいろな魅力があると思います。

首都圏から見れば先進的な企業、テレワーク的なことはあるかもしれませんが。これまで政府機能の分散から進めようとしたが、企業が細やかに結び合わせて分散を作ってくるということです。愛知大学は名古屋駅の真横にも校舎が

あります。そこが本拠地ですが、こういう視点で、飯田を名古屋から注視しているということです。その点からいうと、飯田の戦略、これは既に行ってきたと思いますが、名古屋圏が移動圏に確実になるということです。そこで、移動圏の浸透というのがもっとあっていいと思います。

また、三遠南信地域は、様々なフレームを組んできましたが、もう少し先には、食とかエネルギー、自然環境が結び合わさってくるというストーリーがもっと強固にあっていいのではと思います。

三遠南信地域は、全国的に見ても特徴的な県境を越える大きな圏域です。この圏域ができるのに様々なことがありましたが、2006年に三遠南信地域連携ビジョンを策定しました。そのきっかけが、道州制の区割りにありました。その当時、愛知県と静岡県と一緒に長野県は全部道州の単位が外れていました。これを三遠南信一体にと発案があったのは牧野市長はじめ南信州地域の方々です。それは長野県内から見ると県から出ていくのかという話になってしまいますから、決断ですね。そこから三遠南信連携の腰が据わった。まさに三遠南信地域づくりの発火点がここにあると思います。

以上、最初の域外への飯田の取り組みということについて、若干の状況と意見を述べさせていただきました。

○大西氏（一財）日本経済研究所 常務理事）

戸田先生、ありがとうございます。

三遠南信、広域連携は極めて重要ですね。飯田の場合にはリニアだけではなく、高速道路網の整備も進んでいます。その点もご指摘いただきありがとうございます。

それでは、竹内先生お願いします。

○竹内容員教授（金沢工業大学）

私は元々、今日司会していただいています大西先生と一緒に、リニアの招致プロジェクト委員という形で飯田に関わらせていただきました。その後、市役所の中にリニア未来都市ブランディングというプロジェクトを立ち上げさせていただきました。今日は、私は特に具体的に実践していたところを、自己紹介を含めて説明させていただきます。

こちらが2016年に経済産業省において飯田市の取組を発表した資料になります。



私自身は、元々民間企業出身で、その後、マーケティング・ブランディングといったものを専門としていくつかの会社のアドバイザーと、また政府の知財関係の委員を務めさせていただきました。「ポップカルチャー」ですとか「クールジャパン」など、「クールジャパン」と呼ばれる以前20年ほど前から日本のみならず海外に展開し、地域、それから日本と世界をどうつなぐかということを実践してきました。このとき、経済産業省に、日本の地域がなぜ大都市圏と差が出るか、コンテンツの実例をもって説明をさせていただきました。その時に飯田市の取組をまずは知ってもらわなければならないということで、私はこの数年取り組み、飯田の地域ブランド確立を目指すプロモーション連携について発表しました。飯田の紹介ですとか、リニアによって飯田がどう変わるか、それだけではなくて飯田の文化・歴史なども知ってもらった上で、では地方として何ができるか提言しました。

私の専門のブランディングの話ですと、地域が独自の力を持つためには、私は3つの要素が必要だと思っています。まずは「セルフプロデュース力」、要は中央からの支援とかそういったものに乗るのではなく、地域独自としてどのような発信、域外と連携をするのかという自力ですね、力を

付けることができるか。それを具体的に実践するためには、地域にあるそれぞれの魅力、これを再認識して「集積する力」の必要がある、と、ここまでは結構やっている地域が多いのですが、問題は「発信力」です。やはり地域、大都市圏と地域の基盤の差は情報メディアリテラシー、メディアに対する制度、それからそこに接触する率が非常に少ないと、悲しいかな、未だにテレビ局は大都市圏にしかほとんど、いわゆるキー局といわれる番組をつくることはありません。映画の制作会社、ゲームの制作会社もほとんどが大都市に集中しています。そんな中で日本のみならず世界にどういふふうに地域が域外とつながる道をつくるか、これが発信力になるかと思っております。

この数年、私が飯田で行ってきたことは、まず地域の有識者、市役所の皆さんと一緒にプロジェクトを立ち上げました。当然、若い世代の方々、飯田コアカレッジにも協力いただき、地域から発信する様々なシンポジウム、セミナー等を、できるだけ地域内で連携スタートしました。様々な方を呼びながら、単純にゲストを呼ぶのではなく、その方々に飯田の魅力を知ってもらい、飯田の広報として皆さんに影響力ある方々に知らしめる形、そして市役所の皆さんにご協力いただき、飯田の魅力は何かということを一から再認識しました。その中で様々なイベント、こういったものをお手伝いしながら、それをどのように外に対して発信するか。具体的にはHIDA2027.comのようなメディアを立ち上げまして、飯田の新しい取り組みをすべてこちらから発信しております。新しい形のガイドブック、これは絵本風のガイドブックを作ったりですとか、海外インバウンド向けに絵巻物風のガイドブックを作ったり、これはすべて地域の中の方で基本的には完結するスタイルをとっています。

こうした展開をする中で、今、アフターコロナの問題が取り沙汰されていますが、ここは次のステージに上がるタイミングであると思っています。そのことは後ほど述べさせていただきます。

#### ○大西氏（(一財)日本経済研究所 常務理事）

竹内先生、ありがとうございます。

確かに、飯田の絵巻物風のガイドブックは、これまでのものとは全くテイストが異なっていますから、明らかに飯田の新たなファン層が開拓できたのではと思います。

それでは、牧野先生お願いします。

#### ○牧野教授（東京大学大学院）

私自身の専門が生涯学習でアウェイ感がありますが、飯田市の公民館に深く関わらせていただき、特に住民の学びやまちづくりについて全地区をまわりました。考えるべきだと思うのは、従来学んできたことを一遍捨ててみるということも大事だということです。これを私たちの関係者は

「学び捨てる」といいますが、さらに学び直しをしていくことの中で、地域の人々がどうやって自分たちの地域をつくり直していくのか、考えなければいけない時代に入ったと受け止めています。

それで第1部の論点として域外とのつながりですが、飯田の魅力というのは、域内のものがいろいろあり、域外との関係をどう考えるかということもありますが、もう一つ、今日の課題の中に付け加えたいと思うのが、人生100年の時代を迎えているということです。さらに言えば、長野県はいわゆる健康長寿な地域がとて多く、飯田はその典型でもあると思いますが、人生100年をどう生き抜くのかを考えながら、域外との関係も考えてく必要があると思います。例えば、従来の学校教育をベースにした学びでよいのかどうか。それをもう少しその地域でいろいろな形で学び直しを展開しつつ、新しいものを受け入れていくことを考えなければいけないのではないかと考えます。

飯田市が大事にされてきた公民館活動とか、市民全体がアクティブラーナーになっていくこと、さらに飯田市民は、自ら探求していく文化を持っていて、その中で新しいものを自分たちで楽しんでしまうという風土を持っていると思います。そうしたものが、竹内先生がおっしゃった新しいブランドをつくり発信していくということに関わるでしょうし、さらには人生100年を考える場合にも、例えば、従来ならシングルステージ、1つの企業に入って定年までいるとか、転職はあっても同じような働き方をして、60、65歳で辞めてその後老後という議論であったものが、そうではなくなっているところがあり、むしろパラレルステージというか、いくつかのステージがあり、その中で自分の人生をつくっていく力とか、さらにパラレルキャリアという形で、同時にいろいろなキャリアを走らせる方々が出てきているはずで、そういう人々のあり方をどう考えるかということもあると思います。

さらに、大学ではオンラインで授業をしたり、いろいろな会議もオンラインで行っていますが、先ほど台湾の事例がありましたが、感染症を私たちがどう予防するか、どう新しい生活をつくるかという、個人の自律性が問われてくるようになります。もっと言いますと、今、死因の第1位はがんであるように、生活習慣病が基本になってくると、ある意味これはマルチファクターの疾患になってくるので、自分で進行管理や健康管理をする時代に入ってきたといわれています。その意味では、自律・自立ですとか、自分といったものをどう考えるかといったことが、医療の方でも問われていた面があります。

もう一面では、人工知能がとて発達し普及していますが、その中で産業的に戦略化されてきているのはパーソナライゼーションです。例えば、私という存在を生体認証技術と併せて認証しながら、私の健康管理を企業が、またシ

システムがしてくれるようになる。コロナの関係で海外へ行けなくなりましたが、海外へ出るときも、今、日本の出入国管理は、パスポートを置いて写真を撮られるだけで、人が見なくても全部データベースで私を管理して、出入国にOKを出すシステムになっています。顔認証技術が使われています。こういうかたちで、どんどんシステムを個人化していくことが可能になるわけです。逆に言えば、私といったものを私自身が強く意識をしていなくても、システムが「あなた」ですという時代がやってくるということです。そういう問題の中で、先ほどの自律や自立という健康管理といった問題と、パーソナライゼーションをどこで接続をさせるかという、簡単に言えば、システムに依存することで万事OKであるという議論になりつつある。その後、何がおこるか、簡単に言えば、本人が考えなくてもよくなってしまふ。そうなるとう当然、欲求水準が下がっていきますから、ある意味では生理的な水準で終わってしまう。または、ある種快樂原則みたいなものとか、またはこうしないとうなるという、脅すような議論になっていってしまう。市場が縮小してしまうだけではありません。人間のあり方が、それでよいのかという形で、問われることになります。本来人間とはそうではないはずで。今日3つ目の議論に関わるかもしれませんが、パーソナライゼーションの問題をどうやって社会的な問題に接合させていって、自分たちがそこで生き生き、楽しく生活ができるようになるのか。相互の関係性を考えなければいけないと思います。

これは2番目の議論とも関わってしまひますが、飯田が持っているある種の優位性というのは市民が議論好きだということです。非常に関係性を重視するような形でお互いに議論を重ねていきながら、お互いに認め合う関係をつくっていく。その中によそものを巻き込んでいく力を持っているので、戸田先生や竹内先生がおっしゃったようなことと絡めていくと、もっと対外的に飯田の魅力を発信できるのではないかと思います。

そのようなものと、これからの新しいコロナの時代、または人生100年の時代などを絡めていくと、飯田のあるべき姿みたいなものが見えてくるのではと考えています。

#### ○大西氏（一財）日本経済研究所 常務理事）

牧野先生、ありがとうございます。

確かに、飯田は議論好きな方が多いですね。今日、画面には私とパネリストの先生方の5人しか登場していませんが、本当は議論に割って入りたいという方がいっぱいいらっしゃるのではないかと思います。

続いて、尾久土先生大変お待たせいたしました。よろしくお願ひします。

#### ○尾久土教授（和歌山大学）

牧野先生が、アウェイ感があるとおっしゃっていましたが、もっとアウェイなのが多分私かなと思っております。

私、どの立場で呼ばれているのか心配してしまひて、観光光学部長ですので観光の話をしなきゃいけないのか、元々、天文学の研究者なので、天文学といっても、皆さんと1億倍くらいスケールが違い、1億光年とかいうところを見ているので、宇宙人枠として変わったことを言ってくれという話なのか、それとも飯田では、ドームシアター、バーチャルリアリティの仕事をしていますので、その話かなと思ひDXとかVRについての各論、具体的な話を提案させていただければと思ひています。

最近、飯田に來ないねとよく言われますが、私がかかわっている地域が主に4つあり、1つは元々和歌山の天文台にいましたので、そこで天文観光をやっています。飯田市美術博物館のプラネタリウムの活用では、元スタッフが美術博物館に移りましたので、もう僕の出番がないかなと思ひています。また、与論島には、1カ月に1回以上入ってしまひて、クラスターが出ている間もいしまし、來島自肅の間にも学生たちと一緒に訪問してしまひました。あと岡山県の西粟倉村というところが非常にユニークな活動をしてしまひて、そこもかかわっています。

今日は特にVRの切り口でいきたいと思ひますが、ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、2001年に飯田市美術博物館のプラネタリウムの更新に関わらせていただき、ハードだけでなく地域のコンテンツをプラネタリウムに投影することをすすめ、今は20作品くらいあると思ひます。このようなどころは、多分日本中、世界中探してもないです。今でも地元のソフトをドームシアターで流しているというのは日本一だと思ひています。ただ10年も経てばプロジェクターが非常に暗くなって古くなってきますので、そこは陳腐化してしまひます。

この間、ベンチャー企業の社長とズーム会議をしたときに、コロナで最近オフィスには1週間に1回行くか行かない、それでも十分仕事はできる、なぜオフィスに集まるのだろうかという話になり、それは業務を超えたコミュニケーションの場で、本来デスクなんかいらなくて、一緒に食事したり映画観たりするような場所の方がいいかもしれないと社長が言ったので、私は即座に、それなら観光地であつたらと話す、それは環境が変わっていいよねとなりました。今、ワーケーションという言葉がありますが、それは社員が観光地に行って会社に帰るのですが、そうじゃなくて、都会のオフィスではなく、観光地あるいは地方に社員が集まる場所があることだと思ひます。リニア時代の飯田、社員が集う場所を最適にするにはということなんです。

オリンピックがどうなるかわからないですが、組織委員会へのアドバイスの仕事をしてしまひます。オリンピックを超臨場感のあるVRで楽しもうというプロジェクトのリーダーをやっています。

今見ているVRというのはまだまだ出来損ないで、世界

の研究のレベルは360度16Kというところに来ていて、視覚情報的には16K以上あると、見るだけの観光というのはVRを置き換えることができる。つまり移動がない観光、旅行のない観光というものだって実現できる。もちろん人の交流というのはできませんが、自宅にしながらテレグジスタンスな観光というのが出てくる。2025年の万博に実現できればと思っていますが、実はアメリカで24Kのドームというのが建設中で、視覚情報だけでいえば、これは本当にどこでもドアです。視覚情報的にはそういう時代になっています。

これはもう私の妄想ですが、外部資金を調達しないといけない難しいことは承知の上で、この先美術博物館のドームをリニューアルしていただければ、人生100年死ぬまで旅ができ、世界中のスポーツ、エンタメが鑑賞できる。逆に地域の文化をこの解像度で配信できる。そうすると究極のVRは世界、都市、地方の概念を変え、飯田は世界とつながりながら、暮らし、学び、働くことができるかなというのが、最初の提案です。

#### ○大西氏（(一財)日本経済研究所 常務理事）

尾久土先生、ありがとうございました。

ドームシアターの話は、なかなか迫力がありますね。以前に、飯田市美術博物館のプラネタリウムを見学しましたが、球体で映像を見せるという発想は独特です。そこで先ほどご紹介のあった高品質の映像が体験できるのであれば、他ではできないことだと思います。ありがとうございました。

ここで、少しパネリストの方々の中で議論をしたいと思います。竹内先生、ドームシアターのお話についていかがでしょうか。

#### ○竹内容員教授（金沢工業大学）

素晴らしいですね。あえて東京、名古屋、大阪など大都市圏の話をしますと、地方との違いは基本的に2つだけです。1つは情報の密度、人と会って会話や会食して、人との接触を通じてコミュニケーションを取ることが、どんな産業、学術系においても大事です。そのときに様々な情報、様々な人とすぐ会えるか、話せるか、これが大都市の魅力です。もう1つは、企業であるとか体験する場が多い。例えば、今プラネタリウムも東京ですと、本当に様々な場所に最先端のVR技術とか新しいものが出ています。次の携帯のジェネレーション、5Gですが、渋谷で5Gの実験をするオンラインのイベントがあり、渋谷の街のネオンサインとかそういったところに物理的な様々なものが出現する。要は、直接人間が身体的に接触することができる。これがなかなか今まで地方にはなかったことです。

先に結論を言いますと、コロナによって何が変わったかということ、東京で隣のビルであろうが接触してはいけない。オンライン化する。そうすると、今、私はオンラインの背

景をあえてバーチャルにしていますが、これどこにいるかわからないです。もしかしたら沖縄にいるかもしれない、東京かもしれない、実は飯田にいるかもしれないことが起こりうる。今のように情報とか体験というものの垣根がなくなります。そのときに一番必要なものが、何をするかというイノベーション、これは人間の想像力によって司ります。もう1つが、技術です。今のVRの話は、アイデアさえあれば、このVRの技術を飯田に持ち込んで、飯田が東京・大阪を飛び越えて海外と直接つながるチャンスになるというそのすばらしい提案。そのときに大事なものは、世界で今、何がそれぞれの分野で動いているかということです。アメリカのVRの世界では、解像度と情報の映像の密度感というものが勝負になってくるので、この技術をいち早く飯田が取り入れて、24K、16Kを日本で最初にドームを造る。そうすると何が起こるか、世界中からこれを見に来ようという方々が来ます。こういうことに対して挑戦するかどうかというのが、アフターコロナの時代に地域が外とつながるのではなく、外から人を呼び入れるきっかけになると思います。

#### ○大西氏（(一財)日本経済研究所 常務理事）

竹内先生、ありがとうございました。

それでは、2つ目の論点、飯田の特徴でもある域内での取組みを、どのように評価してこれらを引き継いでいくのか、あるいは変えていくのかというテーマに移っていきたいと思います。

それでは、次は牧野先生からお願いします。

#### ○牧野教授（東京大学大学院）

これは域内の話ですが、域外とも関わると思うし、今の議論とも関わるとは思います。これからの生活の仕方考えますと、今までは企業に通勤する、空間を移して仕事をして帰ってきて自分のプライベートがある、プライベートな生活とパブリックな生活が切れている形で、パブリックな生活の方が重いというような生き方をしてきたと思いますが、これからは、空間があまり問題にならない時代がやってくる。プライベートな生活の中に、「働くこと」をどうはめ込むかが議論になってくると思います。その中で、この飯田がどのような形で人を引きつけていくのか。ある種の特色をもって、例えば、バーチャルな場があって世界から観に来るということはあると思いますが、もう少し日常生活ということを考えたときに、日常生活を飯田で送り、その中に自分が「働くこと」を織り込みながら、ある意味では納得できるような、人生100年を自分で設計しながら生きていくことが問われてきている。

私自身は、北海道とも関わりがあるのですが、いろいろな自治体が今それを考え始めていて、これから多分東京の若い人たちを取り合う時代がやってくるという印象があります。このようなこと、つまり自分の時間をどう使うのか

を自分で決めなければならない時代がやってくることをどうまちづくりにはめ込んでいくのが、問われているだろうといったことが1つあります。

もう1つは、これは子どもたちのことをどう考えるか、次世代の育成をどうするかということ、地域がこれから生き延びるかどうかといった大きな課題です。子どもたち自身が自分の人生を設計しつつ、いろいろなチャレンジをして、新しいものをつくり出していく力を持つようになっていくことが大事だと思います。その意味で飯田は、既にそういう力を持っていると私たちは受け止めているところで

す。PDCAというプラン、ドゥ、チェック、アクトの進行管理の形があります。エビデンスを出し評価をして、次のPDCAを回せと言われ、実際に、医療モデルや製造業の歩留まりを高めるための仕組みでもあります。これを教育やまちづくりにこれをはめると縮小再生産になっていってしまいます。評価されますから、次のプランを立てるときに、できることしか言わなくなり、どんどん小さくなっていってしまう。

それに対して、AARという循環モデルが、アンティシペーションとアクションとリフレクションですが、あります。楽しそうなことを予期してニヤニヤしちゃうみたいな感じがアンティシペーションです。それに基づいてやってみて、リフレクション、振り返って見て、うまくいかなかったら変えればいい。うまくいったらもっとしようという形になっていくという意味では、変な評価をしないということ

です。これは解放系の構造がとられているので、探求していくことが地域の中で起こる。そうすると、生活そのものを探求的にとらえつつ、自分たちがそこでアクティブに学んでいく。学ぶというのは単に知識を蓄えるということではなくて、飯田の皆さんが得意な分野ですよね。いろいろなことを議論しながら、いろいろなイベントを自分たちで考え出して、いろいろな楽しい生活を創り出していくといったことをされているわけですから、そういう文化を育んでいくことと、先生方がおっしゃるような対外的ないわゆるアピールの仕方、発信の仕方ということがうまく合わさっていくと、この飯田というのは、とてもやっぱり魅力的な地域になると思います。

すでに生活の中にそういう文化をお持ちなので、もう少し自分たちなりに発掘をし直すというか、学び直していきつつ、新しいものを創り出していく方向性、アクティブラーナーになっていくことがこれから大事だと受け止めています。

#### ○大西氏（一財）日本経済研究所 常務理事）

牧野先生、ありがとうございます。

飯田の場合、生涯学習も勿論ですが、「地域人教育」と

いうことで、高校生が自分たちの地域のことを学びながら、自分の人生も自分で考えていくような取組みも既に行われています。これらは、今後ますます重要になっていくと思います。

それでは、次に、戸田先生お願いします。

#### ○戸田教授（愛知大学）

スライドがあります。様々な境を越える、越境への発火点ということですが、今は、会うな、会うな、ということ

で非常に越境しづらいです。越境とは、どこでも引っ付いていくのではなく、個性や自己の自律、これがはっきりしたときに、はじめて境を超える越境が起こってくると思います。先ほど牧野先生のお話にありましたが、自律的な人間があり、自律ができたときに越境する。

地域の最大のコンテンツは人であり、それが一番強いと思います。その意味では志をどう広げるか。もう既に飯田でたくさんの方が志をお持ちだと思いますが、それを発火点としてどう広げるか。これまで飯田はいろいろ関わらせていただいて、3つのことを志の広がる場として期待したい。

1つは、共に考える地域づくり運動。飯田で今さら言うかという感じはあるのですが、リニアの話、ハード整備は時間がかかります。そこで3、3、3と記載していますが、全体の時間を3分の1づつくらいに分けて、考えることが必要です。今がなかなか苦しいところで、先が見えないときこそ、この未来を見続ける取り組みが重要だと思います。ある人は希望を感じ、ある人は希望を感じない時ですが、この希望の部分が共有できていくということが、越境の発火点ということ

です。この地域づくり運動が継続され、より進化していく。飯田の一番の基盤になります。

2点目は、外の地域から別の背景を持って入って来られる人がいる。そこに小さな共振という変化が起こってくる。この共振していくことが重要だと思います。飯田の移住者の調査で何十人かインタビューした時に、1人で首都圏から農家に研修に来たお嬢さんがいて、その農家のお嬢さんになった。農家の方は、農業よりお嬢さんの方が大事だと思われたのかもしれませんが。そこで一つ変化が起こった。お嬢さんはスイーツを作りたいと、しかしお父さんとお母さんは、それはならんということがあったのですが、結局それは意志を持った人の思いのようになっていくということだ

だと思います。小さな変化ですが、これができるなど共振していく、1人からの地域変化へ。飯田は既にありますが、これをもっと高めていくということが越境への発火点たると思います。

3点目は、地域を選んで発想するものづくりで、第1回のシンポジウムで萩本さんがお話になりましたが、エス・バードでこれをリードしています。これは非常に驚くべきことだと思います。今までローカルでいろいろなインキュ

バージョンに関わってきましたが、企業のトップが地域を選んで発想する、そこに人生をかけていくというのは非常に稀です。これが1つのモデルだろうと思います。技術よりも経営、経営よりも人、そういうことでこの志の部分がつながっていく。これが第3の越境への発火点ということだと思います。

人が越境への発火点だと、飯田の取組は既にありますが、さらにこれが結び合わさっていくということは、非常に期待し見てみたいと思います。

## 2. 飯田の「域内」での取組み

→飯田から実現できる未来:越境への発火点たる人(今ある「志」をどう広げるか)

①広域圏の変革(3.3.3)→未来を見続ける取り組み  
・ともに考える地域づくり運動

②一人からの地域変化→外部人材による小さな変化の共振  
・移住調査:外部人材(農家の例)

③地域を選んで発想するものづくり→モデル(技術<経営<人)  
・多摩川精機、スズキ、VW……

### ○大西氏 ((一財) 日本経済研究所 常務理事)

戸田先生、ありがとうございます。

非常に詳しく解説いただきありがとうございます。

確かに、飯田の方は議論し始めると火がつかますね。その火は外から来た我々のような人間にも燃え移っていくといえますか、自然と巻き込まれていくような経験をすることが結構あります。

それでは、尾久土先生、お願いします。

先ほど、飯田は「コンテンツの宝庫である」というお話しも出ましたが、観光分野に限らず、飯田の域内の取組みについてご評価いただければと思います。どうぞよろしくお願いします。

### ○尾久土教授 (和歌山大学)

守るものと変えるもののお話ですが、守るものとしては、当たり前のことですが、豊かな自然、文化、それに根ざした暮らし。先ほど、VRが究極に進化したら観光がVRに置き換わると誤解したかもしれませんが、見た目は現実と一緒にとてもよく見えます。中途半端ではなくてそのものが見えるので、そうすると、興味のある人は本当に行きたくなる。そのためには来たときがっかりさせない。景色はきれいだけれど暮らしは残念だとならないために、ぜひ守ってほしいと思っています。

最近、鹿児島県の与論町に出入りしていますが、コロナのクラスターの話は、ニュースやネットで流れていることと、島の人たちと話をしていると全然違います。5,000人の

町で56人のクラスターが出たわけですが、みんな病院がないから島の外に連れて行かれるわけですが、帰ってきたらみんなお帰りお帰りという感じで歓迎されている。そんな島にはぜひ観光客もまた行ってみたいと思います。

変えるものとしては、行政、教育、特に公民館も、幅広い世代が交流する対面の公民館、非常に大切ですが、これからは飯田の公民館活動が続いていくということを考えたときに、やはりこのDXも加速すべきと思っています。アナログをなくせという意味ではないです。DXで生まれる新しい価値があるだろうし、それから今このようなオンラインの会議をして疲れるとかしんどいとかいいますが、しんどい理由は精神的な問題もありますが、多くが技術的な問題です。その問題はいずれ空気のようにになると期待しています。例えば、これは西粟倉村のアプリですが、本当の住民票とは違うのですが、このデジタルな住民票は持っている様々な情報が届いて、なんか関わりたくなってくる、関係人口を増やす意味でもDXすることによって面白いことができます。結局、デジタルとアナログのほどよい塩梅をどうしていくか大切と思っています。

### ○大西氏 ((一財) 日本経済研究所 常務理事)

尾久土先生、ありがとうございました。

西粟倉村の「アプリ投票」、なかなか面白そうですね。飯田に関わっている関係人口、我々もその一部ですが、なかなか意思決定に関わる機会はありませんが、もし、このようなソフトが導入されれば、関与の仕方も違ってくと思います。

### ○尾久土教授 (和歌山大学)

さすがに、投票するわけではないですが、アプリの登録者が村民の人口を超えていると聞いています。

### ○大西氏 ((一財) 日本経済研究所 常務理事)

なるほど。ありがとうございます。

竹内先生、先ほど、ブランド化も含めて、域内の方を巻き込んで変えてきているとお話もありましたが、2つ目のテーマについてお願いします。

### ○竹内客員教授 (金沢工業大学)

2つ目のテーマが、「守るべき、迎えるべきもの」ですので、まず守るべきものは何かという形をお話しします。こちらは3年前から実験的に作っております「Visit IIDA」というサイトになります。これは海外の人たちからの目線により、飯田のすばらしい情景や歴史、そういったものを7つの言語で紹介しているサイトです。これを作るにあたって、飯田の市民プロジェクト、市役所、そして学生の皆さんに、飯田の何がすばらしいかを一度みんなで考えましょうとあって、市民の方々と一緒に作りました。人形のまち、焼き肉のまち、天龍峡、自転車を含めたスポーツ、水引、要するに変えてはいけないものというのは何かと云ったら、飯田にしかない固有の文化、そしてそこに根付

く人々の生活から生まれる様式です。

しかし、飯田の皆さんは麻痺しています。例えば、絶景、コロナの前はほぼ毎週飯田に来ており、普通に飯田に泊まって朝起きると、東京では見られない清々しい景色が日常のように飛び込んできます。ところが飯田の皆さんは毎日これを見ているので、ほぼ感覚が麻痺している。大事なのは、ツーリスト目線、いわゆる旅行者であるとか、域外の人たちから見て飯田のすばらしさは何かということを感じる事です。このサイトを作るにあたって一つお願いしたのが、外の人が見てもすばらしい絶景写真を地域の方々と一緒に作りましょうとあって、一つ一つの写真に対するこだわりは非常にクオリティを考えて作りました。こういうものは変えてはいけない部分です。

それで変えなければいけないことは何かというと、「IIDA2027.com」というサイトがありますが、ここ数年、ブランディングで行ってきたすべてのことを掲載しています。例えば、これは飯田のキャラクターナミキちゃんですが、飯田をオタクのまちにしたらどうかと、このナミキちゃんの声を声優さんにあててもらっています。これは、飯田が発信する文化で唯一無二、他の地域にはない個性を作り上げていくことですが、何でもかんでもオタクのまちとしてアニメを持ってくればいいみたいな、そういうことではないのです。飯田にしかないもの、飯田にあるべきものというのを、どうやって生み出すか、つくるか。この意識変革がなければならぬのです。これを行う時に一番大事なのが、都会にしかない情報であるとか技術です。この人たちが持っている創意工夫、未来のビジョンをどう飯田に持ち込むか、これを続けていって、飯田の皆さんが刺激を受けて変えていく。これが変えるべきことと思っています。

一つの事例ですが、これは4年前にVRの8Kの撮影カメラを飯田に導入しました。日本でこのカメラはまだ数台しか入ってないときに飯田に持ち込み、飯田の情景を案内する映像を作り、それを世界に発信しています。これを擬似的にすると、ゴーグルを付ければ、飯田駅前を一緒に歩けるような構成になっています。カメラは海外から輸入したのですが、その会社と直接、飯田コアカレッジの先生方をつなぎまして、技術を蓄えつつ、撮影のアーカイブを積み重ねていくことをしています。現在、飯田ならではの8KVR映像は30から40くらいストックが貯まっています。これは飯田にしかないノウハウ、要するに変えていくための技術革新になります。

変えるべきもの、守るべきものというのは、飯田には本当にすばらしい文化、人の力、公民館力などがあります。時代に合わせてどんどん変えるのではなく、何が大事かということを皆さんで考えつつ、最新の技術、人の力をもって変えていく、これが大事ではないかと思っています。

○大西氏（（一財）日本経済研究所 常務理事）

ありがとうございました。

本当に具体的なお話で、先ほどの飯田駅前の光景なんて、手を伸ばせば売店のものが買えそうなくらいにリアルな、解像度も含めてすばらしい映像だと思いました。

2つ目の論点まで来ましたが、ここで、もし会場の方からご質問があれば受け付けたいと思います。皆さんいかがでしょうか。

○司会

視聴者からいただいているご意見、ご質問を紹介いたします。

まず、ネットには無料のコンテンツがたくさんあり、自粛でますますコンテンツが増えた気がする。多くのものがデジタル化をしていく中で、コンテンツの見せ方や新しい技術でどのように稼いでいくことができるのか。地域づくりへの活用も含めてご意見を伺いたい。

続いて、団塊ジュニアが高齢者になる2040年には、飯田の人口は10万人から7万人になると推計されている。人生100年時代で高齢化がさらに進んで、ヘルスケア産業が今後の重点産業になっていく。あらゆるデータ、あるいは医療が持つデータの統合がされていく可能性もあるが、データの活用等について、どのように考えておられるか。

それから、VRによって見るだけの観光が定着するのであれば、行く必要というものがなくなってくるのではないか。その場所を訪れる意味は何でしょうか。体験、交流、それとももっとほかの何かでしょうか。

さらに、VRによって視覚化して充実した新しい観光が実現して、それにより飯田市に興味、関心を持っていただくことができれば、例えば、飯田市にある様々な生産品のネット販売等による新たな経済効果も実現できそうな気がするというご意見もいただいております。

また、様々なところで分断や二極化が進んでいる昨今、飯田の地区の中でも様々な価値観の違いが生まれてきている。価値観の合うコミュニティに細分化されていくことになり不安がある。分散して個が強くなっていくという社会に対して、様々な視点からヒントをいただきたいという意見もあります。

○大西氏（（一財）日本経済研究所 常務理事）

ありがとうございました。

やはり飯田ですね。予想通りたくさん質問が来ているようです。それでは、先生方にはまとめてでも構いませんので、ご質問への回答、コメントをお願いします。

○牧野教授（東京大学大学院）

社会が分断されているとか、高齢者が増えていく、人口が減るということもありますが、議論すべきは、子どもたちをどう育てるかにも関わりますが、AIを使い、さらにバーチャル技術が発達する中で、個別最適の方向に動いて

いることです。社会の多元化、ダイバーシティ、多様化といったことも大事になってきていて、今まではいわゆる部分最適でやってきたところを、個別最適で突き詰めていきながら、今度それを全体最適にどうもっていくかを議論しなければいけない時代に入ったと思います。

子どもたちの教育で、GIGAスクール構想が始まっていて、国が児童生徒一人ずつにタブレットを渡して、個別学習に切り替えていく議論を始めていますが、それだけだと、バラバラになってしまいます。探究的な活動をして、価値をどんどん多元化させていくと同時に、お互いに交流したり教え合ったり、学年を越えるなど、全体が学び合う関係をつくりながら、常に新しい価値をつくりだしていく社会状況を生み出すといったことが大事になってくると思います。

飯田の方々が行ってきたことは、そのようなところもあると受け止めています。例えば、伊那谷は谷で開かれてない閉塞的な地域なのかというと、そうではなくて、ある意味でよそから人が来ることを口を開けて待っていて、その人をパクッとくわえて、いい気持ちにさせて様々なものを落とさせ、それを受け取って、自分たちでさらに熟成させて使いこなすということをやってきたはずです。人形劇も、元々は淡路島のものが来ていると聞いたことがありますが、外からの人を楽しくさせて、自分たちで楽しむ力を持っているわけですから、今度は、先生方がおっしゃった新しい技術と結びつけていきながら、対外的に示していくこととなります。

それは、3つ目の議論と関わりますが、従来のアーキテクチャのような、人々を方向づけていく社会の仕組みではなく、むしろアフォーダンスという環境が持っている意味を自分たちで解釈して直しながら使いこなしていくことがある。さらにそれをモディファイアフォーダンスという形で、今度は自分たちが新しい価値をつくる番に回るという作り方があると思います。

社会の分断といったことも、実は個別化の中で全体最適にもっていくと、相互交流の方に結びつけていく中で、新しい価値をつくり出す社会に切り替えていくことができるのではないかと考えています。そうしたものを飯田の方々は持っているのではと受け止めています。

#### ○大西氏（一財）日本経済研究所 常務理事

どうもありがとうございます。伊那谷が、域外から来た人にいい思いをさせてくれるというところは、自分自身の経験からもまさにその通りだと思ってお聞きしていました。

#### ○牧野教授（東京大学大学院）

学輪IIDAがまさにそれじゃないですか。

#### ○大西氏（一財）日本経済研究所 常務理事

そうですね。その意味で、私たちも飯田にうまく使われ

ているという言い過ぎかもしれませんが、こういう場所に出演させていただいているということかもしれません。

では、尾久土先生、よろしいでしょうか。

#### ○尾久土教授（和歌山大学）

観光をそもそも論で考えたら、日常の空間を離れて非日常を体験するということです。その離れてというところが実は旅行です。

鉄道が好きな人とかあるいはファーストクラスに乗る方は別として、移動は苦痛のため、観光の中の移動、旅行の部分というのは、ない方がいいわけです。

VRの観光は、旅行がなくても実は観光になるというのが私の考えです。今のVRのレベルというのははっきり見えないので、いろいろごまかせますが、本当に見た目と同じだけ見えて360度見ると、例えば、きれいな街並みがあって後ろを向いたら駄目だとか、リアルタイムで見えていると、そこにいる人たちの雰囲気まで見えてきます。ごまかせないレベルの映像ができたときにやはり人は選びます。そのときに飯田は強いと思います。街並みもきれいですし、人々のマナー、その暮らし方を含めて非常にしっかりしていますので大丈夫だと思っています。

それから稼ぎ方ですが、観光映像の多くはPRを目的にしていて無料です。つまり、行政の補助金などにより代理店がつくっているものが多くて、お金を払ってまで観たい映像はまだありません。和歌山大学では、観光映像というものも研究しており、本当にそこに旅をしたくなる、あるいはそのお金を払っても観たくなるっていうようなものについて考えています。例えば、VRの場合は、テレビ局と一緒に映像をつくっていますが、テレビの人たちは、人を感動させる、動かす力、ノウハウを持っています。それと研究を結びつけることをしています。普及によりカメラが安くなってきました。今だと研究室にもあるくらいになりました。さらに普及し世界中に8Kのカメラが出てくると、観光について見放題、月額千円見放題という、サブスクリプションが出てくると考えています。

今までお金がないとか、体が不自由だから観光できなかった人が、移動なしの観光が安くできる。その安い観光というのが実はサブスクですから、10億人が観ている。そうすると、そのカメラがある地域にお金回ってくるというような、新しい映像ビジネスが出てくると期待しています。

この考え方は、私が京都のオーバーツーリズムについて、観るだけだったら来なくても楽しめるのではという思いを提案していたときからのことです。実際には来られなくなったので、今では行かなくても観光であると話をしています。

#### ○大西氏（一財）日本経済研究所 常務理事

ありがとうございました。それでは次に、戸田先生お願

いします。

#### ○戸田教授（愛知大学）

VRを新しいものにどうつなげるか、身近な問題では大学の教育です。大学の教育が行き詰まるというか、ツールを失っているという状況で、大学をビジネスモデルとして考えると、何百年も変わってないやり方をしているということだと思います。Web化の極論では、著名な先生が一人やればいいということになってしまいます。それでは駄目で大学で知識だけを教えているわけでないから、知恵をやはり教え、一緒に学ぶということであれば、人間がもっと全面に出てこないといけない。だがそのためのツールが少なすぎるということです。今、おそらく日本中の大学で膨大なオンデマンド素材があがっているはずですが、これをどう使うか、あるいは使えるのか。あまりにも技術弱い。非常に短期間の中だったということではありますが、おそらく来年も変わらないはずです。

VRは完成形である必要はまだないのかもしれないが、人間を補完する技術として教育の中にもっと入ってくると、大学教育というものが変わる。それは日本が変わっていくということに他ならないと思います。そのコンテンツ、材料を提供する、あるいは評価していくツール、それを教育の中に盛り込んでいくような実践的な取り組み、こういうことが日本の大学を変えていく大きな要素になると思います。そのコンテンツの一つが学輪IIDAで、既に飯田ではたくさんの学生が来てここで学ぶ。ここで学ぶということが、来るということとバーチャルで学ぶ、その融合モデルにVRの果たす役割は大きく、経済価値的にも膨大なものがあると思います。

#### ○大西氏（一財）日本経済研究所 常務理事）

ありがとうございます。飯田を題材にしたコンテンツは、これからも毎年生み出されていくでしょうから、これらをどう活用するのか、まだまだ方法があると思います。では、竹内先生大変お待たせしました。

#### ○竹内容員教授（金沢工業大学）

現在皆さんがご覧になっているZOOMの背景の画像は飯田の実際の空です。私が飯田に訪れたときにもものすごい青空で空気感もあって、絶対都会では見られないかと、結構これをズームの壁紙にして海外の人に使うと、「それはどこなんだとか、それは新海誠のアニメか」と言われるのですが、これはリアルな飯田の背景ですよと言うと、「飯田はどこにあるんだ」となります。

さっき言いましたが、2つのことにお答えします。

まず、映像コンテンツが世の中に氾濫して、そこで利益を生むのが難しくなるというのは、これはそのとおりです。私が専門としているアニメーションでも、この数年、パッケージ、いわゆるブルーレイ・DVDとか全然売れていません。大ヒット作品は別ですが、じゃあアニメが衰退してい

るかということ、全くそんなことはなくて、むしろ日本を代表とするコンテンツとしてもすごい量が制作されています。どこでマネタイズ、お金を儲けているかということ、簡単に世界中に売っているんです。それも今まで日本のアニメを見たことがない国もまだまだたくさんあります。この数年、中東とかでアニメ解禁になったりしてしまっていて、先ほど先生がサブスクリプション、定額制とありましたが、定額制というのは、確かに一つ一つのコンテンツの収益性は下がりますが、分母、母数を上げることによって、たくさんの人たちに影響力を与えます。

おそらく質問の方は、飯田で映像をつくるときにどう世界と戦えるかみたいなイメージを持っていることだと思いますが、そのとき大事なのが、最初から地域の方々には地域のを日本の中で見せようという意識でやりますが、今、世界の、地球の裏側の人たちがどういうことに興味を持って、どういう日本に興味があるのか、それを考えて映像をつくとですね、ユーザーの皆さんというのは、結構自分たち好きなことをやっていそうですが、ビビッドに視聴数とかそういうものが全部お金としてカウントされますので、彼らは何が受けるのか、世の中、今、何を求められているのか、ものすごく考えながら映像をつくっています。こういった要素があれば、世界に出せる映像で稼ぐことができるかなというのが1つ目の質問です。

もう1つですが、先ほどからVRの話が専門になっていますが、厳密にいうと、VRの先をやるべきと思っています。VRの先はMRといいます。MRはミックスリアリティ。バーチャルリアリティは、この中にある架空の世界、例えばテレビゲームみたいな世界ですね。それでARというのが、オーギュメントドリアリティ、拡張した現実、要はこの現実をさらに拡張する。今、皆さんが見ているこれも、竹内という私がいる裏側に飯田の空がある。これは、私はバーチャルじゃないですから、現実ですから。そこが拡張して飯田にいるように思う。これがARです。

2年前にKDDIと飯田市の包括提携を結び実験したのが、まさしくARです。人工知能キャラクターを画面上で合成しますが目の前にはいない。ところが目の前にいるように、牧野市長から臨時職員の辞令交付を行いました。画像の右側にはこのキャラがいませんが、ARの技術によってこれが入ります。

この技術を使うと、例えばこれは飯田の足湯、天龍峡の足湯を撮影してVR360度で、それで目の前にナミキちゃんの声の声優さんが実際に一緒に足湯に入っている。それをVRで見ることによって、ここだけだとVRです。ところが実際に簡易足湯のキッドを持ってきて、足浸りながらVRゴーグル付けると、実際に自分が足湯に入っているが、目の前にこのように声優ナミキちゃんの大使がいる、これが拡張現実です。映像というのはやはり切り取ったサ

ンプルでしかないので、そのサンプルによって見たり接触したりした世界の人たちが、この足湯に入りに行こうとか、もっとわかりやすいのは、食べ物とか体に触れる空気とかの体感性、飯田のこの天龍峡のすばらしいおいしい空気。吊り橋を渡ったときの恐怖、癒やされる風とか、これは映像では絶対無理です。映像はこの一部を切り取っていますから、それを体験したくなるような、その場に行っておいしいもの食べておいしい空気に触れる。これが連動することによって、つまりAR、バーチャルによる映像と現実を組み合わせることで、飯田に来てもらえるきっかけになると思います。

また、世界で初めての実証実験をKDDIとトヨタと連携しておこないました。自動運転で走る車に乗りながらVRの技術を活用した観光案内を体験するものです。飯田の街並みにあわせて、自動運転の車の横にキャラクターがいて案内をしてくれます。ニュースを見て、実際に飯田に行ってみようとか、体験しようということが生まれます。これが技術と人のアイデアによって地域の魅力をつなげる形で、それが観光産業などを創出する事であり、実際に人に来てもらうことにつながると思います。

○大西氏（(一財)日本経済研究所 常務理事）

ありがとうございました。

○司会

会場からのご質問をお願いします。

○下平氏（いいだ未来デザイン会議 委員長）

いいだ未来デザイン会議の下平と申します。

今日は教授の先生方の皆様には大変ポジティブな、そしてアグレッシブなご議論をいただきまして大変ありがとうございました。飯田の人口は10万人からやがては7万人に減っていくわけで、これは全国的なことでもあります。人口減少を受け入れた対応もこれからしていく必要あると思っています。その点で、VR・AIの時代を踏まえながら、地域を支えていく、経済を支えていくことについて、どのようなとらえ方をされているか、今後の参考をお願いします。

○竹内容員教授（金沢工業大学）

今のご質問は、地方消滅、数年前に結構世の中では話題になりましたが、もう地方のみならず日本全国で人口減少というのはもう社会問題になっています。

これをちょっと止めるというのはかなり別な角度の議論になりますので、具体的に人口が減る中での取り組みは大きく2つあります。高齢社会になったときに、高齢の方々が技術を活用してより豊かに積極的に生活できる環境をつくるか。世界の中でも日本は残念ながら一番高齢な国に突入します。そのときに例えばロボットであるとか、AIであるとかVRであるとか、最先端の技術を使って高齢化社会を最初に豊かな国とする日本モデルをつくる。日本ではな

く、飯田にそのモデルをつくれれば、全世界からそのモデルを見学したい、体験したいという方々の注目が集まります。それは飯田の独自ノウハウを提供できる新たな産業になります。

もう1つは、流入人口を増やす具体的な方策をすべきです。ここ数年ブランディングで一番力を入れているのは、極端な言い方をすると、飯田をオタクが住みやすい世界のまちにしたい。オタクとは、アニメとかキャラクターが好きな方々、なぜならば飯田は世界に名だたる人形劇のまちです。アニメもキャラクターも昔でいうところの人形です。人形を好きな、アニメが好きな、ゲームが好きなオタクたちは、世界中から飯田に来てください。川本さんの美術館もあれば、それだけじゃ駄目です。最先端のアニメとか漫画の好きな人たちが住みやすいまち。例えば一例ですが、11月3日の丘フェスだけじゃなくて、市街地を1年中そういうまちにできたら、わざわざ飯田に移り住みたくなる若者が増える。そこで新たな産業とか交流が生まれるというまちづくりができないかというのをやっています。

最後に、今年11月にはそうした観点から、ズームではなく、アフターコロナを見据えたMRと産業と飲食を連動した、全く新しい実証実験をやろうと予定しています。発表できる段階になりましたらご案内いたします。ぜひ体験してみてください。

○大西氏（(一財)日本経済研究所 常務理事）

ありがとうございます。

それでは、最後の3つ目のテーマで、「飯田だから実現できる未来戦略」ということで、それぞれの先生方から、本日のまとめということでご発言をいただきます。

○尾久土教授（和歌山大学）

具体的な提案ですが、できれば飯田からオリンピックを楽しんでいただきたいと思っています。詳しいことはまだリリースできませんが、美術博物館でオリンピックを楽しむということをやっていただきたいと思っています。気に入っていただければ、予算ができたときに結構ですので、美術博物館のプラネタリウムを、頑張ってLEDの16Kドームに更新いただければ、学輪IIDAの仮想ネットワーク大学の中心になったり、あるいはこういったものができると、先ほどのアニメ好きや映像制作の好きな人たちが、ドームの周りに集まってきて、そこでワーケーションであったり、様々な企業が集まってくるクラスターができたらいと思っています。星空はみんなアニメの人たちは好きですから、美しい星空も残していただければなおよいかと思っています。

○牧野教授（東京大学大学院）

あと少し経つと人口は100万ずつ減っていきます。今世紀半ばには9,700万人くらいです。2060年には8,700万、今世紀末には5,000万人くらいまで減ると予測は出ています。

高齢化率は2060年に42%になることが予測されていて、そのころ、14歳までの子どもの割合は7%くらいになると言われています。

もう1つ、2060年に認知症を患う方が総人口の14%になるという予測が厚労省から出されています。それは大変という話になるわけですが、反面、今、高齢者の方々というのは、20年くらい前と比べると体力的に10歳から15歳くらい若返っているという結果が出ています。もう1つは、頭の方ですが、実は新しい能力が発見され始めていて、短期記憶というのはどうしても下がっていきます。物忘れ、物覚えがうまくいかない。ただ逆に人間関係形成能力とコミュニケーション能力は、死ぬまで伸びるということが今言われ始めています。そういう能力というのは、バーチャルとか、新しい技術とともに親和的ではないかと思います。また、子どもたちの問題で、貧困問題ですとか、様々な問題で社会が分断されているという議論がよくありますが、基本的には、これは関係性の貧困の問題と言えると思います。飯田の皆さんが持っている関係をつけていく力といったものが、これからこの社会にとっては、とても有利に働く時代がやってくるのではないかと。その中で子どもたちが認められ、自分から社会を変えていく、自分の生活を変えていこうと思えるような社会になっていくといったことと同時に、選択的に飯田を選んで来る人々を増やしていくということが、これから可能になると期待をしています。特に人間に注目したときに、飯田が持っている潜在力というのが発揮されていくと、とても魅力的な人を集めるような場所になっていくと期待しております。

#### ○竹内容員教授（金沢工業大学）

全世界が一つのことで、ここまで変わるパラダイムシフト、社会変革が起こることはないと思います。都会だろうがアメリカだろうが中国だろうが、みんな同時に飲食どうするか、観光どうするか、今考えるスタートラインに立ちました。

今までのように、飯田は東京から遠いから、飯田はなかなか情報発信力がないからということはある意味関係なくなりました。オリジナルで何ができるか、飯田のよさは何かというのを今改めて見つめ直して、こういった今日、参加いただきました先生方の英知も使い、最新の技術も使い、いち早く地方を、日本を代表する、世界を代表する飯田ならではのライフスタイルをつくったら、様々な問題は解決するのかもしれないと思っておりますし、そういったご協力をさせていただきたいと思っております。

これを実行できるのはやはりトップの改革力です。改革路線というか、市長がいいと言ったらどんどんやるスタイルがあるからこそ、飯田はここまで来たと思っています。ぜひ市長には、改革を止めずにどんどんやっていただきたいことを最後に要望させていただきます。

#### ○戸田教授（愛知大学）

スライドを1枚用意しました。やはり人に着目したいと思います。VRあるいはARなどを介して、飯田に人生を見つけた人がより多く来ることに尽きると思っています。

### 3. 「飯田だから実現できる未来戦略」 →コロナ禍での移住戦略

#### ①移住要因の変化

・pull <push（例：3.11と移住：生活の意味、学び社会の魅力）への着目

#### ②三遠南信地域おこし協力隊実態調査2019からの示唆

・成長志向 ・人で決まる決断 ・なりわい

#### ③移住戦略

・pushを拾い上げる視点

・接する人

・移住→「なりわい」形成への官民共同

・背景としての県境地域（南信州～県境を越えて）

・もっと生かすべき名古屋圏

移住要因としては、プッシュ要因とプル要因、地域から押し出す要因と引きつける要因があります。コロナ禍では圧倒的にこのプッシュ、押し出し要因の方が強くなっていると感じます。1月段階で、首都圏で地方圏に生活を計画、あるいはそれを実施しようと考えている、動き出しているというのは15%くらいという内閣府のデータが出ています。これは今もっと多いと思います。南信州の移住者調査を3.11のときに始めました。3.11でも、人生や生活の意味を考える。そこにプッシュ要因が多く見られた。そういう人々にとって、飯田の学びの社会というのは大変魅力的なものがあるだろうと思います。

去年おこなった三遠南信地域における地域おこし協力隊の調査を紹介します。協力隊の動機として、成長志向、新しい技術、そういうことを求めてくる人が多いということが調査結果に出ています。そういう意味で、今日話のあった新しい技術、関係性などと有効だと思います。もう1つは、接触する人で移住を決める。調査では担当者の人柄で決まるといようなものもありました。人生を決めていくときに、信じられるのは人だということがあると思います。一方、具体的にになると生業がうまくいかない。行政事業は多いのですが、民の関わりの部分がビルドインされていないので難しいわけです。これを受け入れ体制の中で整備していく。これから日本の多くの人が迷う中で、こうした試みを行うわけです。ちょうどスーパー・メガリージョンの中間点、人を結び得るエリアであり、越境の発火点ということになると思います。

#### ○大西氏（（一財）日本経済研究所 常務理事）

戸田先生、ありがとうございます。

それでは、最後に牧野市長から総括をお願いします。

#### ○牧野市長

本当にそれぞれの先生方に、まずお礼を申し上げます。

改めて先生方が飯田に対して熱い思いを持っていただいているということ確認できまして、本当にうれしく頼もしく思いました。

特にこのコロナの時代、ともすればなかなか先が見えない中で、先生方それぞれに大変前向きなご意見をいただきました。もちろん人口減少の中でどうしていくのか、地域として難しい課題もありますが、これだけ前向きなお話をいただけたということ、飯田市に可能性があるということを感じていただいているということ、本当にうれしく思いました。

ぜひ、その思いにこれからも応えていけるような飯田市であり続けたいと思ったところです。どうしても飯田市に住んでいますと、絶景であってもそれが当たり前の風景に見えてしまう、やっていることが当たり前のように思えてしまうことがあります。改めて先生方から、この視点だと飯田はこのように見えるということを書いていただけるのは、本当に改めて目から鱗が落ちるような思いをもっているところです。

学輪IIDAのネットワークは、そうした先生方の知見、経験、知識といったものが、私たちの目から鱗を落としてもらう、そういう役割も持っていることを今日改めて感じました。

コロナの時代、どういったところに住みたいか「AREA」が調べたところ、なんと飯田市はベスト10の10番目に入っていたということでもあります。全国的に見ると、実は飯田市の立ち位置はかなり注目されていると思いますが、実際に住んでいる我々から見ると、そんな状況なのかなと思ってしまう。その部分を客観的に具体的にしていけば、その感覚が段々とすり合っていくということが、先生方のお話でわかった気もいたします。

今後も、学輪IIDAや様々な機会を通じて飯田との関わりを持っていただければ、と思います。飯田市はいつでも口を大きく開けて先生方をバクッと捕まえていい思いをさせる、そういった地域であり続けたいと思いますので、どうかよろしく願いいたします。

今日は本当にありがとうございました。



## 第3回「飯田だから実現できる未来戦略

### ～持続可能で豊かな地域へのデザイン～

開催日 令和2年9月14日(月) オンライン配信  
配信会場 飯田市役所C311～313会議室

コーディネーター	法政大学 名誉教授	石神 隆
パネリスト	事業構想大学院大学 教授	渡邊 信彦
	東京都立大学 教授	大杉 寛
	法政大学 教授	高柳 俊男
	立教大学 教授	阿部 治
	農山漁村文化協会	中田めぐみ
	しんきん南信州地域研究所 主席研究員	竹内 文人
いいだ未来デザイン会議の議論から	いいだ未来デザイン会議 委員長	下平 勝熙

#### 1. 開会あいさつ

##### ○牧野市長

今日は、「学輪IIDAスペシャルシンポジウム、シリーズ『いいだの未来デザインを考える』～ after/withコロナ時代における地方のパラダイムシフトと創生～」にご参加をいただき、またご視聴をいただき、誠にありがとうございます。

今日は、シンポジウムにご登壇の先生方も大変張り切っておられるとお見受けいたします。立教大学の阿部先生、法政大学の高柳先生、東京都立大学の杉先生、事業構想大学院大学の渡邊先生、そして農山漁村文化協会の中田様、そしてこの会場に来ていただいております、しんきん南信州地域研究所の竹内様にシンポジストとしてご参加いただいております。

また、コーディネーター役は第1回でもお願いいたしました法政大学の石神先生です。お世話になります、どうかよろしく願いたします。

さて、当シンポジウムは今年で設立10年目を迎えます大学連携会議「学輪IIDA」のスペシャルシンポジウムとして3回シリーズで企画されたもので今回が最終回となります。

8月24日の第1回シンポジウムにおきまして、コロナ時代の新しい社会像や社会的価値につきまして幅広い視点から議論し、パラダイムシフトの読み解き方の示唆をいただいと受け止めております。

9月3日の第2回シンポジウムにおきましては、コロナ禍による足下の変化と来るべきリニア・三遠南信道時代に

起こる変化を踏まえて、「交流・繋がりづくり」の視点から、守るべきものと変えるべきものにつきまして、VRなどの先端技術の視点と人間の学びや地域的な視点からのご議論をいただきました。変化への対応力を高めていくということが必要だと感じたところであります。

本日のシンポジウムにおきましては、コロナ以前の日常に戻ることは難しいと言われる中で、これまで飯田が積み重ねてきた魅力や強みを見つめ直し、それらを生かしながら、誰もが住み続けたい「くらし豊かなまち」をデザインするために、様々な視点でそのヒントを考えていく機会になればと思っています。

本日は各分野でご活躍されております学輪IIDAの先生方のほか、いいだ未来デザイン会議の下平委員長をはじめ委員の皆様方にもご参加をいただいております。メインテーマであります「いいだの未来デザイン」につきまして、幅広くご議論をいただけるとご期待申し上げます。

新型コロナウイルスにつきまして当地域では、7月に1人の感染者が出て以来、感染の確認はない状況で、今までに6名の感染者の確認がありましたが、すべての方が退院されています。

そうした中で市といたしましては、コロナ対策、経済対策をやっていくため、「緊急対応」から「産業とくらしの下支え」、「公助から共助へ」、「新しい日常へ・感染再拡大への備え」といったテーマをもって第1弾から第4弾にわたって緊急対策事業の取り組みを進めてまいりました。さらに第5弾を「飯田らしい新たな日常へ」として、先週、

市議会に補正予算の提案をさせていただきました。

感染予防と経済再生の両立はなかなか難しい議論ですが、検査体制の強化を図りますとともに、これからも産業界やまちづくり委員会、各種団体の皆さん等、多様な主体の皆さん方と議論を交わしながら、市民の皆さんの命と生活を守っていく対策を適時的確に進めていくことができれば、と考えております。

新型コロナウイルスによる社会の変容は長期にわたるという見方もあることから、この飯田の地域が将来にわたって住みよい地域であり続けるためには、飯田が持つ真に守り伝えていくべき価値の意義が問われることになると思っております。

このシンポジウムの議論が、多くの皆さんにとりましてアフター・ウィズコロナ時代に向けた飯田のあり方、その未来に向けた取り組みについての議論を深めていただく契機になればと切に思うところです。

また今年度、策定する「いいだ未来デザイン2028」の中期計画を、リニア・三遠南信道の開通・全通を控える当地の進むべき方向性を示すものにするために、この取り組みの方向性や地域の将来像を考える上での貴重な提言として受け止めることができればと思っております。

皆さん方と一緒にこのシンポジウムの議論をしっかり聞き、また楽しませていただければと思っております。

以上、申し上げます、私からのあいさつとさせていただきます。

## 2. ディスカッション

### ○石神名誉教授（法政大学）

皆様、こんばんは。

私、生まれは飯田の皆様と同じ天竜川水系の浜松でして、同じ水を飲んで育ったわけで、半分は飯田の皆様と同じかなと思っております。よろしく願いいたします。

さて、今日はシリーズ3回目で、これまで2回、主に学輪IIDAの先生方から幅広く問題提起、あるいは提案・議論をしていただきました。

これまで2回の議論の内容は会場あるいはオンラインで参加された方も多いかと思いますが、大きくいえば2つ。まず1つは、このコロナ禍で非常に大変ですが、むしろ前向きにこれをとらえて、飯田の未来への飛躍の大きなチャンスと考えていくことができそうだと、やりようによっては、飯田はかなり優位に立てるのではないかということが一つでした。

もう1つは、マイナスをプラスにとらえて果敢に変えていく復元力といますか、潜在力が元々この飯田には、この地域の中に、あるいは市民お一人お一人の中に昔から歴史的にも備わっていて、今もまさにこれが脈々として流れているのではないかという、そういう意見でもありました。

そういうことからしますと、現在、進められている飯田の中期計画、「いいだ未来デザイン2028」のこのタイトルにありますように、「合言葉はムトス、誰もが主役、飯田未来舞台」、これはこのコロナ禍の現在まさに時宜を得ているのでは、と思う次第です。

飯田地域は言うまでもなく、自然あるいは社会経済からのこれまで様々な挑戦を受けて、それに対して果敢に対応あるいは応戦するという革新、イノベーションの連続であったかというふうに思うわけです。このシンポでは「回り舞台」という言葉も出てきました。激しい変化の挑戦に対する応戦の百戦錬磨の地域ではないかなと思っておる次第であります。その背景にあるのはこの「ムトス」の精神、新しいものを積極的に受け入れて、自分ごととしてチャレンジして未来を切り開いていこうという、この飯田地域の心意気かというふうに思います。

進め方として、はじめに6人の各先生方から問題提起や提案などのお話をさせていただきまして、次に会場からはご意見や提案なども伺い、その後で皆様のお話を聞かれての各先生方の追加的なお話をお願いするという、こういう形でいわば先生方と会場の皆様、あるいはオンラインで聞かれている皆様方との大きな会話をする形で進めていければと思います。

トップバッターとして、竹内さんから、地元の研究所の立場、未来デザイン会議のメンバーの立場から、お願いいたします。

### ○竹内氏（しんきん南信州地域研究所 主席研究員）

私どもしんきん南信州地域研究所ですが、一金融機関と行政機関との連携・協働を通じて地域経済の活性化に寄与することを目的としまして、約9年前に発足いたしました。この学輪IIDAにおいては産学官金連携の一環として、以前より関わらせていただいております。本日は、飯田下伊那地域の一員としてお話しさせていただきたいと思っております。

第1回のシンポジウムのまとめのような話になりますが、まずコロナによるパラダイムシフトが起こるという話が先生方の中から出ておりました。あと、デジタル化、今流行のデジタルトランスフォーメーションが加速していく流れということ、地方への移住希望の増加傾向というところがあるのかと思っております。ここについては専門ではありませんが、デジタルの新しい仕組みを産官学が取り入れていくことは必須だということ、そして人口ビジョンの達成を考えれば、若い人たちが当地域に来たいと思ってくれるような仕組みづくりが当然必要だろうと感じております。

続きまして、リニア・三遠南信自動車道の開通というお話ですが、こちらは表題にもあります、飯田だからこそ実現できる未来戦略ということに関連しますが、一住民としてもこれは当地域にしかない劇的な変化であると思っております。ただ飯田では当然期待も大きい反面、悪い影響へ

の不安感も大きいという調査結果が、私ども当地域研究所のリニア調査でも出ております。この部分の考察というのはなかなか難しいのですが、リニア調査の担当者とも議論しまして、この地域には、将来のあり方について真剣に考えている層が多くいるということの表れではないかなと当研究所では考えております。

もう1点、リニアに関しましては、昨年飯田にお越しいただいた青森大学の櫛引先生のインタビューが大変示唆に富んでおりますのでご紹介させていただきます。櫛引先生は整備新幹線が専門ですが、新幹線効果は、開通を通じて地域経営のバージョンアップがなるかどうか、これが真の新幹線効果、リニア効果であろうということを描べられています。先生の地元の青森県八戸市では、新幹線開通事業を通じて地域が自信を持つことができ、さらにその後の事業に積極的に取り組めるようになり、地域が自信を持ったというのが新幹線効果ということを描べられていて、これは非常に私自身もなるほどと思ったところであります。

その点を踏まえまして、最後に地域住民が自信、誇りを持つ仕組みづくりということを提案させていただきました。第1回、第2回のシンポジウムを拝見して、学輪IIDAの先生方は飯田をすごく褒めてくださっていて、私自身もうれしく感じましたが、では自分自身を含めて地域住民はどう思っているのか、ということ個人的に強く感じました。やはり、今ある地域資源に満足せず、さらにバージョンアップを進めていくことで、より地域住民が誇りを持つ地域というのを、私たち自身がムトスの精神でつくっていかねばいけないということを描いた次第です。

また一つの切り口としては、私ども産業畑ですので、学輪IIDAの知見を生かして、稼ぐ力をもっと高めていくということが大事かと思っております。

#### ○石神名誉教授（法政大学）

竹内さん、ありがとうございます。

かなり率直な地元からのご意見といえますか、ご提案ということで伺いました。今ある地域資源に満足せずという大変貴重なご意見をいただきました。次は、高柳先生、お願いいたします。

#### ○高柳教授（法政大学）

このスペシャルシンポジウムは今回で3回目ですが、ICTとかデジタルトランスフォーメーション（DX）とかいろいろな提言がありました。私は歴史研究者なので、やはり歴史を大事にするというか、よりよき未来を展望するためには、この地域の過去に目を向けて、その経験や知の蓄積から学ぶことが大事ではないかと思ひ、そういう点に絞って2点お話ができたかと思っています。

1つはマイナスの歴史からの学び、もう1つは人の移動の歴史からの気づきです。

まず負の歴史からの学びですが、ここ飯田というか、私

は飯田だけじゃなくて伊那谷全体を考えたいと思いますが、例えば、災害はじめいろいろな形の負の歴史から目を背けずきちんと学んで後世に伝えてきた、という歴史があったと思います。やはり大きいのは満蒙開拓ですね。結果的には自分たちも大きな被害を被ったし、中国の人々にも害を与える、そういった体験をどう語り継いでいくのか。体験者からの聞き書き活動があったり、それからなんといっても民間で2013年、満蒙開拓平和記念館ができたり、あるいは教育の中で伝承したりなどの取り組みが行われていると思います。特に、加害・被害の双方を伝えて、この満蒙開拓を多く送り出した歴史の現場を逆手にとって、むしろマイナスをプラスに変えて、今後の日中の相互理解とか友好親善の発信基地にしようという姿勢が非常に鮮明だと思います。

あるいはよく知られた戦後1947年の飯田大火。これを元に地元で1つの復興のシンボルをつくるということで、飯田東中学校の生徒たちによって「りんご並木」が発案され、つくられ、そして代を越えてずっと守られている。あるいは学校内にも、りんご並木記念室もあるということがあります。

それから昭和36年、1961年の三六災害ですね。これは特に箕輪町の、当時まだ高校生から大学生になったばかりだった碓田栄一さんの努力が非常に大きいと思います。三六災害を体験した各学校の子どもたちの作文を集めて文集『濁流の子』を作り、それが元になって今は天竜川上流河川事務所や天竜川総合学習館かわらんべ、あるいは信州大学などと一緒になって、この名前を冠した「語り継ぐ“濁流の子”アーカイブス」というデータベースがインターネット上でも公開されています。

したがって、私が思うのは、今回もこの負の歴史からどう学んでいくのか。残念ながらコロナの件では、飯田は『朝日新聞』4月29日の一面トップに「デマの流布」の件が出てしまい、変な話、それで有名になってしまいました。流言はもちろん飯田だけの問題ではないと思いますが、この汚名を返上する意味でも、今後この面できちんとした取り組みをしていくことが、いわば飯田に与えられた1つの課題ではないかと思っています。

それからもう1つは、人の移動の歴史からの気づきです。これから人口密集の都会を避けて、あるいはテレワークもできるので都会から地方に人が移動するのではと、先ほども出ました。ただし、歴史的に考えれば、人類は昔からずっと移動しているとも言えるわけです。やはりこれも過去の歴史に即して、移動の要因とか、実態とか、本人にとっての意味とか、あるいは地域にどういう影響を与えたのかとかいうことをきちんと整理して、それを将来に活かしていくことが大事であると思います。

そのポイントとして、この地域で考えると、やはり先ほ

どの満州移民が挙げられます。実際に満州に行った、そして多くの犠牲を払って一部引き揚げてきたことだけではなく、もう母村には戻れないので、この地域の高地の未開拓地や日本の各地に戦後の再開拓に出かけた歴史もあります。あるいは今回の移動は「コロナ疎開」とも言えるわけですが、この地域に特に東京の世田谷区の学校から多くの学童集団疎開が来しました。もちろん縁故疎開もあったわけですし、工場疎開も来て、その後定着した工場もあります。多くの知識人がやってきて、地元の人たちと交流したことも大事な歴史です。戦後すぐ帰った疎開者もいますが、何年も住み続けたり、あるいは死ぬまでここにいた人もいます。例えば、法政大学の教員だった漱石門下の森田草平などは、疎開後、亡くなるまでこの地域にいて、文化的な影響を与えたわけです。

それから近年に目を移すと、例えば、信州大学などへの進学とか就職、結婚などで来てそのまま定着して信州で働く人もたくさんいます。あるいはUターンやIターンで来た人、近年ですと、地域おこし協力隊で来て、そのまま起業している人などもたくさんいます。

ですので、決して何か「地元民と移住者」というような二項対立で考えるのではなくて、元々の居住者とある時期からここに来た人が、共に力を合わせてこの地の文化とか歴史を形づくっているということに、より深い認識を持つべきだと思います。

スライドに挙げた方たち、たとえばこの地域の文化に大いに貢献している今田人形太夫の金井ハマさんや画家の北島新平さんにしても、満蒙開拓平和記念館事務局長の三沢亜紀さんや南信州新聞社の小田嶋正勝さんにしても、みんなある時期によそからやってきた人たちです。逆にこういう人たちがもしいなかったら、飯田・下伊那の文化もだいぶ様相を異にしていたと思います。そういった事実をきちんと知って、それを将来に生かしていくことが大事だと思います。

#### ○石神名誉教授（法政大学）

高柳先生、ありがとうございます。負の歴史、あるいは移動の歴史、時間軸から見たこの現在、そして未来はどうなるかという1つの見方のご提案だと思います。

続いて、大杉先生、よろしく願いいたします。

#### ○大杉教授（東京都立大学）

先ほど、ご紹介いただきましたが、飯田とは10年ほどの関わりがある中で学輪IIDAには創設時から関わっています。どちらかというともっぱら学生をお世話いただいております。先週もオンライン版南信州飯田フィールドスタディに4名のゼミ生を参加させていただきました。関係者の方々にはお礼申し上げたいと思います。

私の方からは、行政学、地方自治論を専門としている立場から、近年の動向とその課題、そして飯田としてどう考

えていくのか、その方向性について簡単にお話させていただきたいと思います。

近年、国の審議会や研究会などで議論されているようなことの中から3点ほど取り上げたいと思います。1つは、ここ数年の流れとして地方創生というものが推進されてきて、この4月からは第2期の段階に入ったわけです。飯田市の場合ですと、このいいだ未来デザインの中に、その地方創生の計画の中に総合戦略も組み込まれている形になっているかと思いますが、それぞれの地域で地域創生が進められていく中で、やはり非常に重要な点だとして注目されたのが、人づくり、地域人材育成というふうにも言ったりしますが、こうしたことが重視されてきたのではないかと思います。そして、この第2期の地方創生にあたっては関係人口という言葉が出てきました。私はこの言葉が出てきた意味をどうとらえるかというときに、単に移住定住であるとか、交流人口というだけではない、これまでの頭数を数える人口から、そういった発想から脱却する方向性が見えてきたのかなと思っています。どういう人がどういう形で関わるのか、そこが問われてくるということです。そして飯田の場合も、まさにフィールドワークなどを通じてですが、現場実践という形での人づくり、そういった環境をどう形成し、持続可能化させていくかということが、今、地域に問われているのではないかということ、まず第1点目として指摘したいと思います。

第2点、これはもうデジタル社会、DXということが言われておりますが、行政にあっても、このコロナの特別定額給付金の支給のオンライン申請なども上手くいかなかったというようなこともありました。ますます行政のデジタル化が進められていくと思います。それに伴って、システムの標準化、共通化ということが言われています。個々バラバラの仕組みではなかなか立ち行かないということで、ここはなかなかそれぞれの仕組みを独自に育ててきた地域としては抵抗感もあるのですが、むしろ標準化、共通化した上で、それぞれの地域にいかに関に立つデジタル活用ができるかということが問われていくのではないかと考えております。今年には地方分権一括法ができて20年ということで、分権20周年というようなことも言われていますが、どちらかという、今までの地方分権改革が、国と地方の行政間の手続き型の分権であったのに対して、こうしたデジタルの技術を含めた共創型の分権に舵を切っていかなければいけないのではないかと、ということ、2点目として指摘したいと思います。

そして3点目、圏域や広域化が重視されるということで、飯田市では定住自立圏をいち早く取り入れ、モデルとしても非常に評価されているところでありますが、全国的に見ると法制化の議論に対してかなり反発があり、議論として

は漂流した感があります。市民にいかに腑に落ちる形で圏域・広域化を進めていくかということが、これからますます問われていくと思っています。

そうした中で、基本的な方向性として、適疎・適密の地域づくりと共創都市ということをお話ししたいと思います。

先ほど申し上げたように、量で量る人口、過疎・過密という発想もそうですが、人の数、頭数が多いか少ないかということではなく、コミュニティやネットワークのあり方、人の質を問うあり方で、どういう距離感をとっていくのか。過疎でもいけないかもしれませんし、過密でもいけない。適度な距離感をとりながら、いかにそのクリエイティブなオープンイノベーションを起こしていくような都市になっていくかということが重要かと思っています。そして、これまでに人づくり・地域づくりを通じて培ってきた「共在」感覚、共にある感覚ですね、離れていても飯田のことを考え続けたいということ。今、高柳先生の話の中で、戦時の疎開の話、世田谷区という話が出ましたが、離れていてもお互いにそういうふうを考え合う、そういう感覚を仮にリニアができて便利になったとしても、きちんとそういった心の豊かさを持続・発展させていくことが重要ではないか、こういった要素をぜひ基本計画の中に入れていただければと思います。

#### ○石神名誉教授（法政大学）

ありがとうございます。

現在のこの未来デザイン2028でも人口フレームが随分議論されていますが、ひとつはこの単なる数というだけではなく、いろいろな質も考えなくては行けないと、未来デザイン2028への提言としてお伺いしました。

続いて、渡邊先生、よろしくお伺いいたします。

#### ○渡邊教授（事業構想大学院大学）

皆さんもうお話をされていますので、共通なところになってきますが、これから起こる未来ということで、もう確実に人口は減ってくる。もうこれは皆さんわかっていることで、この人口統計はほとんど外れたことがないと言われています。もう間違いなく日本の人口は減っていく。じゃあどこが減っていくかという、明らかに偏重して減っていきます。これは多分確実なことになってくると思います。そうなったときに、コロナによって地方にみんな移っていく、地方が一つ一つコミュニティをつくっていく風潮になっていますけれど、そこがある意味、産業という意味では、それから経済という意味では、大きな裏で見えない戦いが行われていると思っていただきたい。コンピュータは、その人口の減ってきたところを補足していきます。コンピュータが補足していくのですが、その補足していくというものは、シンギュラリティが、2045年がコロナも含めて2030年に入ってきた、早まってきていると言われています。そうしたら短期間のうちにどういった形でい

くのか、もう極端な話、エネルギーはどんどん効率化されてきますので、エネルギーは0になっていく、安くなっていく。そうなったときに何を武器に地域が特徴を出していくか、すごく重要になってきますね。

1940年中国戦争になって、日本のオリンピックが行われた年、40年は棄権をしたので幻の年です。64年が前回。そして今年がなくなって来年ですから、2021年ということですね。レジームは、1940年は軍人の時代でした。つまり軍人の時代というのは何かというと、つまりお国のために死んでくるということは一つの価値を持っていた時代です。それから1964年にはそれが企業戦士の時代、つまり24時間働けますかというような時代でした。それが2020年、今どうなっているか、それを創造する人たちの時代になってきています。主体は全体でした。みんなが言うことが正しかったし、それが縦の時代、つまり1964年には個人になり、それが協働というふうに変わってきています。力は武力からお金に変わり、今はお金では資本ではなくて、信用というものが力を持っています。組織は軍隊から会社になり、今後はコミュニティベースです。私も独立して5年になりますが、会社に所属してなければできなかった仕事は1つもないです。今はもっとある会社も含めてコミュニティものというもので、プロジェクトベースで仕事が進むようになってきます。地縁・血縁、お金の縁から、価値観が共通な人たちが集まって仕事をすることになってきています。

コロナが一気にくることによって、オンラインは飛躍的に、もう戻ることはできないので、上手く使っていくしかない。地方分散のチャンスでも、魅力のないところには本が行かないという事実が起きてきます。地方に人が増えていくというぬるい考えでは本当に上手いかわなくて、実家があるとかは別として、東京に実家がある人たちは、どこかに行こうと思ったときに魅力のないところには行かないです。そこはリアルな価値というのはどこに高止まっていて、ライブやアートだとか、そういった価値も含めて頑張っている。それがつながりや活動というものを変わってくる。そうすると、今までが多数決でみんながよいと思っていたのが、そうじゃなくて、僕らがよいと思っているからいいんだという、強いコアコンピタンスを持たない限りは、その地域はよくなっていかないです。コミュニティは分散化していきます。みんながいいという多数決ではなくて、分散されたコミュニティ自身が価値を持たない限りコミュニティは死んでいきます。つまり地域は過疎化していきます。

そんな中、飯田が何をしていくか。実は下でもう大きな戦いが始まっていると思っております。テクノロジーを使ってどう地域をいいものにしていくか。特色のある地域づくりをしないと、もっと人口が減っていくと思っていま

す。距離と時間は優位性にはならないのです。逆に言うと、距離と時間がデメリットだった飯田は、それによってデメリットは下がっていきます。飯田はどんな土地にしていけるのか。自然・環境・豊かな・個人が、というムトス、そういう心の中に入っているものはあるとして、それ以外にやはり産業とか、教育だとか、もっとわかりやすいメニュー、もの、テーマを明確に出していく必要があると思います。最も宇宙に近いまちだとか、最も海外、国境に近いところだとか、元々製造、精密機械が強いで3Dエンジニアが多いとか、デザイン思考に浸透したとか、誰にでもわかりやすいものを軸に、教育から産業までを一気通貫でもっていける、そのようなまちづくりが必要だと思っています。そのような方向で、皆さんの力を使いながら、次の2028年に向けて大きなテーマを打ち出せるといいのではないかと、元々飯田はすごいいいまちですし、私が初めてきたときに感動したまちでもありますので、ぜひ頑張ってくださいねばと思っています。

#### ○石神名誉教授（法政大学）

渡邊先生、ありがとうございます。短い5分でいろいろな印象に残るものがありました。

続いて阿部先生。このコロナ禍は、これからもとても大変なことになる気候変動への前哨戦ではないかなと考えています。阿部先生からは、これから益々重要になる持続可能性、SDGs、環境教育、人づくりの観点からのお話があるのかなと思います。阿部先生、よろしく願いいたします。

#### ○阿部教授（立教大学）

立教大学の阿部です。私は飯田には学輪IIDAの一員として、また立教大ESD研究所と飯田市がESD地域創生連携協定を結んでいることから来させていただいています。

ESD（Education for Sustainable Development）という言葉はまだ馴染みがないかと思いますが、「持続可能な開発のための教育」と訳され、環境、社会、経済、それから文化のすべてをつなぎ持続可能な社会を創る担い手を育てる教育・学習のことです。昨年末の国連総会でESD for 2030が決議されました。これはESD for SDGs（国連持続可能な開発目標）ということで、SDGsの17目標全てを貫通する形でSDGs達成のための人づくり、すなわち、SDGs推進のエンジンとしてESDが位置づけられたことを意味しています。

地域創生、これはまさに住民一人一人が、地域の多様な資源との関わりや地域との関係性を主体的に深めていくことでつくりあげる、環境・経済・社会・文化のトータルな視点で持続可能かつ災害からの回復力が高い地域社会を創ることと定義しています。

飯田市では特に遠山郷に私自身も入り、遠山郷にある2つの保育園、2つの小学校、1つの中学校、これらすべての学校でESDを導入し、地域と連携した地域創生の取り

組みを支援しています。

今日の飯田市の強みを生かした未来ということですが、既に何人もの先生方がおっしゃっているように、飯田の強みは、学輪IIDAもその一環ですが、公民館をベースとした社会教育のように飯田全体が学びの土壌を持っていること、さらには飯田市のエコパーク、ジオパークといった豊かな自然や、深い文化、エコタウンや観光都市といったこれまで飯田市が取り組んできた様々な先進的取り組みなどがあげられます。

これらの強みを活かした形で、これからの10年、ポストコロナを考えると時には、グリーン・リカバリー（緑の復興）の視点を持つことが重要です。グリーン・リカバリーはヨーロッパを中心に始まったのですが、コロナで疲弊した社会を、脱炭素、つまり持続可能なエネルギーですね、自然エネルギーや再生可能エネルギーの技術開発や普及と雇用拡大等で復興しようということなのです。例えば、飯田は人口減少や高齢化社会に対応したモビリティの問題とか、あるいは質の高い暮らしといった様々なことなども含めて考えられるのではないかと。これらすべて、飯田が今まで進めてきた環境都市としての関わり、あるいはエネルギーの地産地消といった、さらにイノベティブな活動が、そのまま活かせるということなのです。そしてSDGsの17目標がありますが、これらの飯田版のSDGsを考える。これまでの強みとしての国際交流、都市間交流等を含めた、あるいは環境等をベースにしたSDGsのローカル版が可能だと思っています。そこにおいても強みである「学び」をベースに置くことです。また、自然災害が多発する気候変動問題、あるいは獣害等、様々な自然の問題があります。そういった自然災害等に強い、あるいは災害を受けたときの回復力の高い安心・安全な地域づくり、これもグリーン・リカバリーの一つとして考えていくことが必要です。

そしてこれらをすべて進めていくためには、人づくり、これが非常に大事だと、このESDを基盤にした人づくりという、これが今後非常に大事だろうと思っています。既にこれは遠山郷地区での実践や、市街地においても地域人教育やLG教育等、飯田市がすでに進めてきた活動があります。それらをベースにした、まさにESDを基盤にした人づくりで、地域への誇りの回復という、つまり地域の資源の「見える化」、「つなぐ化」をしながら地域への誇りの回復を進めていくという、そして持続可能な地域づくりに参画する人づくり、地域の回復力（レジリエンス）の強化、これらが達成されていくのではないかと、そして交流人口等、あるいはIターン・Uターン等、あるいは新たな価値付加型の事業が生まれてくる、そのように思っています。

#### ○石神名誉教授（法政大学）

阿部先生、ありがとうございます。地域の回復力をど

うやって評価するかということで、引き続きいろいろのご議論をお願いしたいと思います。

最後になりましたが、中田先生、よろしく願いいたします。

#### ○中田氏（農山漁村文化協会）

私は、元々農文協という出版社に勤めており、「うかたま」という雑誌を作っていますが、飯田の出身ということもあり、どちらかというと市民の方に近いかなと思っていますので、そういう立場からお話しさせてもらえればと思います。

この「うかたま」という雑誌は年4回の発行で、「まるごと、食べごと」をキャッチフレーズにした女性向けの食と暮らしの雑誌です。飯田にもたくさん読者の方がいらっしゃるって定期購読もしていただいております。手作りの食事とか伝統的な食文化の大切さを伝えるといった内容の記事が載っています。実はこの秋、ちょうど60号を迎えまして、そのときのあいさつでこのコロナ禍の中で、一般の人たちどんな行動を起こしたかを振り返っています。皆さんご存じのトイレトーパーがなくなったり、家庭でおやつやパンをつくるために小麦粉やイーストなどが店頭からなくなったりということがあり、自分のものを自分の手を動かして作りたいという方が増えたと思っています。

それを私たちは、「小さな自給」という言葉にしてみました。飯田という場所は既に「小さい自給」は、できるし始まっている地域だと思いますが、こういうことにすごく関心が高まっているなというのを、読者のアンケートなどから感じます。

うかたまの最新号に「タネから育てるホウキモロコシのほうき」という記事がありますが、これは、大学を卒業したまだ20代のフクシマアズサさんという方が、ほうきの素材であるホウキモロコシを育てて自分でほうきを作るということで暮らしを立てている記事ですが、これがとても評判がいいんです。若い人達の中でこういう生活を始めている人たちがいるというのが現状です。このほうきづくりのワークショップが好評だということで、ほうきのつくり方を筑波大学の先生に教わってきて紙面で紹介してみましたところ、返ってきている読者アンケートでは面白そう、自分もやってみたいという感想がたくさん来ています。

あと、石積みを修繕することを、ボランティアでなくてお金を取っておこなう石積み学校という活動もあります。学校として組織していて、例えばここでは1回6千円を取る事例が載っていますが、それでも人は結構集まります。私が取材したときには、名古屋から、東京の檜原村という飯田でいうと上村とか大鹿とかいうぐらい奥まったところというイメージの村にわざわざ一泊二日で参加費1万2千円、交通費をかけても習いに来る方がいらっしました。また、「季刊地域」という別の雑誌で紹介されている、この

「空き家の改修術」という記事ですが、伊藤洋志さんという方が全国床張り協会という会を作って、実際にそれを学校にしている、家の床張り、改修をしてもらうことで、来てくれた人からお金を取るということをしています。お金を払って他人の家の床張りを手伝うことで、その技術を学ぶということなのです。こういう事例からは、ものがないとか、できないとか、そういう何もないところにこそ今、人が集まり始めているというのが見えてきます。

別の記事では、下栗の「そばだんご」を取材させていただきました。下栗の、こういう地形だから出てくる食文化というのはやはりあって、それが面白い。何もないところだからこそというところがあるのですが、このように「小さな自給」という、私たちが雑誌で進めようとしていることが飯田では既に起こっているし、できるという場所じゃないかなと思っています。高齢化が進むというのはマイナスですけど、高齢者が多いということは実はそういうことを知っている元気な方がたくさんいるといういいことなんじゃないかと。逆に考えると、不便な地域だからこそ、そういった知恵とか技が集積している。便利なおとところだと、何でもできるので、そういうわけにもいかないのですね。飯田は豊かな自然環境があって、元々そういう教養が合う風土があるということで、私たちの雑誌で言っている「小さな自給」が、実践できるし、既に始まっている場所ではないかと考えております。

#### ○石神名誉教授（法政大学）

中田先生、ありがとうございます。「小さな自給」と、まさに飯田にぴったりの言葉だと思います。何となくなんとも温かくて、そして非常に新鮮な言葉のようにお伺いいたしました。

それでは、会場の皆様からのご意見、ご提案などをお伺いしたいと思います。

#### ○司会

この会場には、いいだ未来デザイン2028の策定を進めている、いいだ未来デザイン会議の市民委員の皆様にもご出席いただいております。まず下平委員長から、これまでの経緯等ご紹介をいただき、ただいま先生方のご発言やこれまでのシンポジウムの内容なども踏まえまして、委員の皆様からご意見をいただきたいと思っております。

#### ○下平氏（いいだ未来デザイン会議 委員長）

未来デザイン会議は、飯田市から委嘱を受けた25名の委員で構成され、市の総合計画いいだ未来デザイン2028のこれまでの取り組みを振り返りながら、次年度からの中期4年間の方向性について議論をしているところです。

コロナ禍において今後の計画を考える上で、アフターコロナ・ウイズコロナのパラダイムシフトを考えることも重要ということで、今回のシンポジウムを聴講させていただきました。

デザイン会議では、本日、ご講演をされている石神先生、中田先生、竹内先生にも専門委員として参加いただいています。今年度は7月と8月に1回ずつ計2回開催をしており、テーマごと4つの分科会に分かれて意見交換を行っているところです。

時間もありませんので、そこで出された意見を細かくご説明はできませんが、例えば、各分散会の意見の共通課題の一つといたしまして、今後の飯田への人の流れをどう生み出すか、ということがありました。そのために飯田の魅力づくりや市内外への発信方法、また移住定住につなげるための仕組みや環境づくりに対する意見が多く出されています。今回のシンポジウムでの先生方のお話を参考にして、今後の未来デザイン会議でコロナを踏まえ、これからの飯田市のまちづくりの課題についての議論を深めていきたいと思っています。

#### ○司会

下平委員長、どうもありがとうございます。

続いて、いいだ未来デザイン会議の委員さん方からご意見を伺ってまいりたいと思っております。

#### ○林氏（いいだ未来デザイン会議 委員）

いいだ未来デザイン会議では、産業や人の流れ、またリニアをテーマにした分散会に参加させていただいています。会議の中では、今後の飯田の産業の中心として、航空宇宙産業や食品産業の他に医療産業など、時代のニーズに対応した産業参入への支援が必要という意見や、テレワークなど働き方の変化による地方移住の話題もあり、若者の就職を含めたIT時代に対応する企業への支援が必要という意見がありました。

また、コロナ時代、さらにアフターコロナにおける観光やインバウンドに対しては、地元のツアーの構築や展開のほかに、国際会議の誘致や、交流を生かしたまちづくりや、さらに、それらのためのリニア駅を含めたアクセス道路や二次交通網の推進、強化が必要という意見が出て話し合いをしました。

また、私、飯田青年会議所の理事長を務めさせていただいていますが、我々としまして、就職や進学で地域外に出て行く学生や若者が非常に多い中で、若者が帰ってきたい、帰郷したいと思えるまちづくりのためには産業とか、仕事の視点だけでなく、地域の暮らしも含めたトータルの魅力づくりが必要と考えています。

合わせて、県外、地域外から移住をしてきていただいた方たちの視点からも、この地域の魅力はどういったものかをしっかりと勉強して、飯田、さらには南信州地域の魅力を気づくということが大切と思い活動をさせていただいています。

ぜひとも先生方に、こういった活動や分散会の意見についてご意見をいただければと思いますのでよろしくお願

いいたします。

#### ○西村氏（いいだ未来デザイン会議 委員）

今、コロナで我々の生活状況が一変し、飯田市で行われる行事もほとんど中止となりました。例として、4月下旬に行われる「やまびこマーチ」は全国から多くの来場者があり、30回を超え全国的に知られたイベントですが、1月早々に中止が決定されました。私も毎年、飯田観光ガイドの会員として、多くの皆さんと一緒に2つのアルプスに囲まれたすばらしい早春の景色を眺めながら説明して多くの感動を共有してきた機会を失い、とても寂しく思っています。

また、8月下旬に開催されてきた飯田りんごんといいだ人形劇フェスタも早々と中止が決定し、私の友人からもなぜ中止なんだと問い合わせもありましたが、これもご時世でやむを得ないかなとも思います。全国的に今や世界的に有名になったいいだ人形劇フェスタですが、来年はどのような形でできるか不安があり、オンラインとかネットが発達しても、やはり人形劇は音響、照明、周りの景色、間近で所作をみられる臨場感が大切だと思います。

それから南信州獅子舞フェスティバルも、毎年楽しみにしている人たちが多くいますが、これも本当に最後まで委員の中で、感染者が出たらどうするという指摘があって中止になったと聞いています。

やむを得ない事情ですが、来年はどのような形で復活できるか心配です。野球など観客を3分の1にする工夫などされていますが、この飯田市特有の全国的に知れたお祭りやイベントを、ここで中断させないように、来年は、今まで以上に賑やかなまちづくりとなるよう、私も人形劇ややまびこマーチ、獅子舞保存会などに加入し少しでも貢献しようと思っています。ぜひ先生方のお考えを聞きたいと思います。

#### ○沢氏（いいだ未来デザイン会議 委員）

私は今ちょっと引退をしておりますが、55年間ものづくりをやってきました。飯田のものづくりは98%くらい下請けです。トヨタさんの下請けをやっているところから、友だち同士で、親戚から仕事をもらってきてという方まで様々な方がいますが、飯田はメーカーで世界に打ち出している地域ではありません。私は飯田の特長というのは独創的ではないと思っています。もちろん、リーダーインダストリー、リーディングインダストリーはありますし、それで世界の市場に取り組んでらっしゃる事業所がありますが、それは系列的なユニットのサブコンポーネントみたいなコンポーネントメーカーですから、商品というパナソニックとか、ソニーという、銘柄で世に出たり、市場の中に出ているメーカーはないと思います。

私は殻を破るが必要と考えていて、そのためには飯田の構想の基軸はリニア中央新幹線を長野県の駅としてで

はなく、内陸中央駅みたいなリーダー駅として打ち上げて、そのイメージの中のコンセプトで飯田を中軸として、日本の中へ存在を知らしめるような地域にすべきということです。そうすると学輪IIDAの枠組みも違うと思います。中央の実業家の経済人も特別顧問みたいな形で特別委員長、特別委員というような形で入れていただかないと、飯田に本当のエンジンは入らないと思います。そんな意味で、先生方と共に、いわゆる経済人の交流会、研究会というものに発展していくべきだと思います。近々にリニアの開業も予定されていますし、待つてられない状況の中で、老婆心も含めて申し上げます。

私はサプライズで申し上げますが、飯田の本当の特徴はリニア中央内陸駅です。そのイメージの中で、飯田は、江戸時代からではなく、鎌倉時代から語っていただきたい。飯田には日蓮宗の発祥の地みたいなどころがあります。天竜川、河岸段丘、風越山、それで日蓮など歴史的なものから始まって、新しいもの、人の往来みたいなものを加えていくような、リニア駅というような形の中での人の往来、インバウンドが非常に付加価値もありますし、加速度をつけて飯田をつくりあげていっていただきたいという意見でございます。

ぜひ先生方、それらの側面も見極めていただきながら、飯田というのを本当に愛していただきたいと思います。

#### ○司会

ありがとうございます。大変それぞれ重みのあるご意見をいただきました。それでは、sli.doに寄せていただいたご意見をご紹介します。

まず1つが、「デジタル化、AI、ロボット社会、持続的な社会づくり、これらが進んでいくであろう新しい世界にあって、一人一人の飯田市民は何を求められていくのか。持つべき覚悟というのか、生活の中で変えていかなければならないことや、考え方、意識、そういったものはあるのでしょうか。」

もう1つが、「人口が減って、高齢化でコミュニティの維持が厳しくなる一方で、価値観を共有する形のコミュニティが増えていく。よりコミュニティ同士の連携、あるいは共感が必要になってくるのではと思う。その際に大切になってくるようなこと、考えるべきことは何か。」というご意見をいただいています。

#### ○石神名誉教授（法政大学）

ありがとうございます。今のご意見、あるいは各先生方のお話を聞かれて、6人の先生方から追加的に、あるいはご意見に答える形で各先生方からお話をしたいと思います。

#### ○高柳教授（法政大学）

学輪IIDAの全体会10回のうち7回は出たかと思いますが、初めて出たときにその感想を『南信州新聞』（2012年3

月17日付け）に投稿しました。そのときに実は3つほど提言しております。

まずは、我々都会の大学の「知」を伝えるだけじゃなくて、それとこの地域に古くから蓄積されてきた「学び」あるいは「知」とを、うまく連動させるということが一つ。

それから、あくまでもこの取り組みは飯田市の事業で、名前も学輪IIDAでしょうが、変な話、飯田だけ栄えて下伊那郡下の3町10村がどんどん寂れていくというのは、やはりよくないわけです。当然、飯田市はリーダーとして、この飯田下伊那1市3町10村すべてが共に潤うような、そういう学輪IIDAのあり方が模索できないかということ。

それから大学がこの地になんかということ、学輪IIDAという形で大学機能をもたせているわけですが、実は大学を創ろうという運動は過去にあったわけで、提唱した宮澤芳重さんの活動や生き方にもう一度光を当てようという、その3つをこの記事で提言しました。

学輪IIDAとしては、おそらく3つとも現状では実現できていないと思うんです。ただ、3番目の宮澤芳重に関しては、学輪IIDAじゃなくて、同じ志を持つ地元の人々と近年、宮澤の伝記を復刻したりあるいは新しく冊子を作ったりなど、彼をもう一度思い返すような取り組みをやりました。

今日は、一番目の点について取り上げます。学輪IIDAに参加したときに、この地域で昔から地道に研究や教育、あるいは啓発活動を行ってきた、伊那谷研究団体協議会に加盟する16くらいの研究団体と、この学輪IIDAがもっとつながるんじゃないかと期待していました。しかし、残念ながら、少なくともこれまでの段階ではそういうことはなかったと思います。

また、それとは別に飯田市歴史研究所があって、これは飯田の方はよくご存じのとおり、つくるにあたって地元の郷土史家との間にボタンの掛け違いのようなことがあって、それがまだ尾を引いている面もあると思いますが、その歴史研究所との関係も学輪IIDAは持っていないと思います。学輪IIDAから見ると、非常にもったいないというか、いろいろな「知」が地元にあるのに何かバラバラな印象です。それぞれに長所を持つこの地ゆかりの「知」をうまくつなげ合わせて切磋琢磨することで、今後の高度な「知」というか、いろいろな事態に対処できるような「知」が生まれていくんじゃないのか、と思います。

ですので、今日はいまだ未来デザイン会議の方といろいろ話ができてよかったと思うんですが、こういう場を一つの契機にして、各団体と双方向で学び合えるような、そういう創造的な関係になっていけばいいなと思っています。やっぱり単に議論だけじゃなくて、何か共同で作業をする。例えば、ここを舞台に学ぶ大学生、大学院生もいるわけですが、その学生向けに「伊那谷研究入門」というような、

これまでどのようなジャンルで、どのような研究や成果があり、またどんな課題が残っているのかをまとめるような、そういう入門の本と一緒に作ってみるのも一案です。あるいは、「伊那谷を知る100冊の本」のようなブックガイド、つまりこの地域について学ぼうと思ったら、こういう本は最低限、読まなくちゃいけないというような案内書と一緒に作ってみるとか。何かそういう共同作業をすることが、近年よく言われる「共創」につながっていくのじゃないかと思って、パワーポイントを事前に用意した次第です。

それから先ほどいろいろ質問があって、私はとても全部に答えられるような立場ではないのですが、確かに飯田だけじゃなく、今いろいろな行事がコロナで中止になっていると思います。ただし、何もやらないまま中止になっているわけじゃなくて、例えば先ほど出た8月上旬のいいだ人形劇フェスタですと、フェスタがなくなった代わりに、いろいろな参加団体の短い4、5分の動画を「日替わり動画祭」と称して2、30本ユーチューブにアップしています。それを見た人が、「来年こそ行こう」「今度、復活したら参加しよう」というふうにするわけで、やはりこの制限された条件の中でできることを着実にこなしていくことが大事なのではないかと思っています。

#### ○石神名誉教授（法政大学）

ありがとうございました。

大杉先生、行事の再開とか構造自体を変えていかなければならないのか、あるいは行政としてどう考えていくのか、追加的なご意見も含めて伺えればと思います。

#### ○大杉教授（東京都立大学）

大変難しい質問といたしますか、これはコロナ対策と経済という、国を挙げ、世界的に非常に悩んでいるところかと思っています。アフターコロナとかポストコロナ、あるいはウイズコロナというようなことが言われていますが、こればかりはまだ先が見通せない中で考えなければいけないと思います。

もちろん適切に対処すれば、ある程度コロナの状態が続いたとしても、一時期の完全な自粛状態のような、すべてストップすることはなくなると思うのですが、いろいろな幅を持って、最悪の事態からある程度明るい見通しまで含めて考えていかなければいけないだろうと思っています。

コロナの一番の問題は、このコロナという病気そのものだけの問題ではなく、それに伴って起きる社会的な様々な課題であるとか、既に実は社会的に内在していた問題が浮き彫りになったところかと思っています。そうした負の側面、あるいは負の連鎖がさらに拡大していくところが、一番大きな課題としてあると思います。これに正面から考えていかなければいけないということが突きつけられたのが、今回コロナの中で我々が一番学ぶべき点だとも思っています。

その一方で、やはりそのコロナの元だからできること、それによってできるようになったこと、デジタル革命がさらに進んでいくような側面なども含めて、考えていく必要があります。自分が関わってきた行事ができなくなった、本当にやりたいことができないということが起きていることは確かですが、次の時代、さらにその次の時代にどう伝えていくか、伝え方ということも今問われていると思います。1年、2年の先はそのまま伝えていけばいいのかもしれませんが、じゃあ20年後、40年後、50年後、どう考えていったらいいのか。他の地域でもそうですが、伝統芸能といわれていたものが、昭和の終わりから平成の初めに多く途絶えてしまった地域が非常に多くありましたが、それを復活したときに、別の復活のさせ方をした、させざるをえなかったわけです。それをいい意味で復活できたととらえるのか、やはり元のものができなかったととらえるのか、長い歴史の中でそれをどう考えていくのかということ、今一度我々も考えていかなければいけなくなってきているのかなとも思っています。

先ほどとも独創性ということを言われていますが、この独創性をどうとらえるのか、独創という言葉からして、他との比較という視点が入ってくるのですが、そこから考えていくのか、自分たちの地域の中で自分たちの持っている価値を、市民の皆さんが深く理解し、納得し、ストンと落ちる形になっているのか。今はそれを考える好機であるし、コロナが来ようと思えばと来まいと考えていかないと、次の地域づくりにつなげていけないという段階に来ていたんじゃないのかと思います。地域の主体性は、何によって成り立っているのかきちんと見つめ直すことだと思います。

外から来た人達から飯田の取組は素晴らしいと言われていた中で、もしかしたら見失ってないか、市民一人一人が本当に受け止めきれているのか、総合計画をつくることは、出来上がった冊子ではなく、つくるプロセスが重要で、きちんと共感し、納得し、みんな理解していけるかどうかということが問われていると思います。

この計画づくりを進めていく中で、市民の皆さん一人一人が熟読したくなる計画をつくってほしいと思っています。私も専門分野からして、東京近辺など多くの地域の総合計画などをつくることが多いのですが、いかに市民の一人一人が、子どもたちも含めて手に取って、読んでくれるかということ、考えながらやってきました。飯田の方たちも自分たちのことを振り返り、外に対して独創ということ一度打ち出していけるような、きっかけとなる計画づくりを、ぜひ進めていただければと思っています。

#### ○渡邊教授（事業構想大学院大学）

飯田市は、すごくいいところで、みんなが平均値以上にちょっと幸せなんです。だから、ある意味でいうと、守りたいし、失いたくないし、犯されたくないし、だからと

いって危機感も薄いんです。みんな結構ちょっと幸せなんです。そういう特徴的のあるまちで考えたときに、歴史的にと文化的に守らなければいけないというのは、おっしゃるとおりなんです。経済的にどうかという議論、経済的な立ち位置として、飯田の、日本の中で、グローバルの中での立ち位置を考えていく必要があると、一番初めにお邪魔したときから感じているところではあります。

というのは、下請けとかということよりも、コアな技術や、それを着実につくっていく文化はある中で、その特徴を打って出していくことが、すごくできていないと思うんです。そういう意味で、地域として、突き抜けていくための教育、組織、打ち出し方、アピール、広報、全部一体化として枠組みをつくる。これが新しい未来デザインだと思っていて、若い人たちが帰ってきたくなるまち。帰ってきたくなるまちには仕事が必要、経済が必要、その中に自分がやりたいという価値を醸成してくれる環境がなかったら、若い人たちは帰ってこないと思うんです。逆に帰ってくる人たちは、働く意思があまりなかったり、自然とともにゆったり生きたかったり、そういう人たちが帰ってくるんです。そういう人たちは決して地域の経済的な効率を上げてはくれないのです。上げてくれないといいというまちづくりも当然あるので、そういうまちに飯田はしていくのか、とは言いながら、リニアは止まる、経済は近くなる、そしてその中で産業をつくらうと言っているわりには、その案が足りないよねと思います。

だから、そこに関しては、近くなる時間と距離がほとんどコスト、メリットがある土地になってきますので、その中で経済をどうやってつくっていくか、もう少し特徴的なものをつくっていくか、地域として凡庸になっていってしまうと思います。

あと、催し物がどんどんなくなっていくお話がありましたが、私はバーチャルリアリティの会社を起こして、バーチャルリアリティでものすごい仕事があるのが、ほとんどが展示会だとか、球場でやっているような競技だとかになります。来年に向けてどうしてこうか、基本的に半分しか入れられないとなると、収入が半分になる。収入が半分になると収益力が下がるから、文化的に投資できるものがどんどん減っていってしまう。そうなったらバーチャルとリアルと両方、別の全然違うものを用意して、両方で採算ができるような経済的な仕組みをつくっていくと、かなり皆さん動き始めています。例えば、飯田に行ったときに人形劇、その地域に来てもらって、暗闇の中で見る人形劇、私も見ましたけれど感動しました。それを守るために違う仕組みの人形劇もあって、それと合わせた経済効率性をつくっていく。そんなような動きをしていかないと、ほかの地域はどんどんそうやって文化を守るように動いていくと思うのです。そこは地域として、そういう

ものも取り入れていくんだということであれば、次への仕組みを考えていく形に、地域の大きな旗を揚げないと、今のものを守る、今は幸せだからいいというのが人間の性だと思いますが、大きく狼煙を上げる仕組みみたいなものがあるといいんじゃないか、そうしないと、経済は、のべとしていく中で、格差が広がっていくというのが地域で起きていくと感じています。

#### ○竹内氏（しんきん南信州地域研究所 主席研究員）

自分自身、飯田に40年近く住んでおりまして、自然であったり、人であったり、そういったものの良さというのは常々感じているところですが、それを自分の中でどれだけ落とし込んで周りに発信してこられたのかということは、正直、今回の機会をいただいたことであらためて考えさせられたと思っております。学輪IIDAの先生方に飯田の魅力を逆に教えていただいていると感じた次第です。

先ほどの渡邊先生の突き抜けていくこと、独創性のお話など、示唆に富んでおり、私たち自身が地域の一員としてもっと勉強して、私自身も未来デザイン会議の一員でございますので、そういった提言をしていかなければいけないと思っています。

飯田には考える力があるといわれていますが、それを自分たちの中に落とし込んで、内省して、これからの地域に役立てていかないと先生方に申し訳ない、という気持ちでおります。

#### ○中田氏（農山漁村文化協会）

私は飯田出身ですが、知らないことがすごく多いと思うんです。自分は出てしまった人間で、魅力がないから出て行ってしまった訳でもないのですが、今の仕事をしていると、飯田は、あれも活用できる、これも活用できると非常に面白いところだと気づかされています。それは多分大きな産業にはならない話だろうとは思っています。大きく何かを突き抜けていくというようなことは、提案できないし、それはすごく大変なことだと思います。ただ、自分が手を動かして何かをしようとしたときに、飯田にはすべてのものが揃っている。海はないのですが、その不便さの中でいろいろなものがある。だからいろいろな知恵が生まれてきたと思うんです。それを皆さんと共有したりして、一つ一つ自信を持って、これもできる、あれもできると思えることが大事なかなと思っています。

飯田は地域づくりや農業のジャンルにおいても先進的な考えや技術を持っている方がたくさんいて、私たちもたくさん取材させてもらっています。本を売る仕事もしていますが、飯田の人たちはちゃんと本を買って勉強する人たちだということも、この仕事をするようになって気がついたことです。ポテンシャルはすごく高い。だから平均値以上でちょっと幸せというのは、すごく納得がいきます。この感じから、何かみんな考えていくことができればと思って

います。

#### ○石神名誉教授（法政大学）

ありがとうございます。阿部先生、お待たせしました。人、教育、環境、あるいはSDGs、飯田はまさにトータルな魅力があるし、また非常に長続きする魅力といえますが、僕はあると思うのですが、阿部先生の立場から、先ほどのいろいろなご意見を踏まえてのお話を聞かせていただければと思いますけれど、よろしく願います。

#### ○阿部教授（立教大学）

若者が帰ってきたくなる飯田とするため、学びの場からいうと、飯田OIDE長姫高校が中心に行っている地域人教育があります。これは学校をベースとして公民館等が連携し、地域の自然や歴史や文化、あるいは人という資源を見える化・つなぐ化をします。資源の見える化・つなぐ化をする中で、地域の資源の再評価をしていく、そのプロセスは参加体験型であり、今でいうアクティブラーニングで、大人と子どもが共同で行います。そのプロセスを経て地域への誇りを取り戻していく。飯田の方々は誇りを十分に持っていると思いますが、このことが結果的に地域への愛着、ムトスの精神を育み、それらが帰ってきたくなるという原動力になっていくと思います。さらには、地域の資源の見える化・つなぐ化が、まさに地域資源の産業化・事業化につながっていくと思っています。

先ほど高柳先生が伊那谷学とおっしゃっていましたが、やはり地域学は非常に大切になります。飯田市と同じようにESD研究所と連携している長崎県対馬市では、市民向け、さらには対馬に関心のある人向けに、オンラインの対馬グローバル大学をこの秋から始めます。大学等と連携しながら授業やゼミを月1回行っていきます。島民の高校生以上の方々や、対馬に関心のあるの方々、これは関係人口になります。その方々と最先端の対馬学を学び、そのことが同時に、世界の問題も学んでいくことになります。飯田の場合は、学輪IIDAとしてそのリソースがあるわけで、飯田の市民や関係人口の方々が、飯田について学ぶ機会を設け取り組んでいくこと、将来的な移住定住につながっていくことにもなると思っています。

また、今後10年の取組の様子で未来はないとまで言われている気候変動問題や、生物多様性の問題、さらにはコロナ禍からのグリーン・リカバリー、環境視点の産業の創生などに取り組んでいくために、飯田をベースとしたSDGsが重要になります。この10年で達成していく飯田版SDGsの目標を立てて取り組んでいただければと思います。そのためにはまずは人づくりが重要でベースになると思います。

#### ○石神名誉教授（法政大学）

ありがとうございます。

本当にこれからの10年がどうなるか。様々なものが非常に早く進む、先ほど渡邊先生から15年くらい早くなってい

るというお話もありました。改めていろいろと考え直さなくてはいけない、そういう時代に差し掛かっていると思います。

今日は、私自身も刺激になったお話をたくさん伺いました。様々なご意見を述べ、あるいは広げて、飯田のいろいろな可能性、オプション、選択肢を提示していただいた。これが今日の大きな流れで、シンポの趣旨だったかと思います。

学輪IIDAについて、あるいはいい未来デザインについてのご意見など非常に参考になりました。ありがとうございました。

### 3. 閉会あいさつ

#### ○牧野市長

それでは、改めまして本日ご登壇いただきました先生方、参加いただいた皆さん方に対しましてお礼を申し上げます。本当に有意義な議論をいただきまして、ありがとうございました。

さて、3回シリーズで学輪IIDAスペシャルシンポジウムを開催してまいりましたが、改めてこの学輪IIDAにつきまして、様々なご意見をいただきました。先生方の思いも毎回伝わってまいりましたし、本日はそうした先生方とデザイン会議の皆さん方とで直接意見を交わしていただきましたし、視聴者の皆さん方のご意見を聞くこともできたと思います。

十年一昔と申し上げますけれども、元々この学輪IIDAをやっていると考えたオリジナルのメンバーの皆さん方が、そのままメンバーとして残っていて、特にコーディネーターを務めていただきました石神先生や小畑先生、平岡先生、福島先生はじめ、様々な先生方がそれぞれの思いをもって、本当に10年前から飯田のことを思って、自分たちの立場で飯田に何ができるか考えてやってきていただきました。そうした先生方の輪が、毎年1月に全体会を開いて、こういうことをやったらどうだ、ああいうことをやったらどうだと議論する中で広がってきました。例えば機関誌「学輪」は、アカデミックに言えば紀要のような役割を果たすものですが、もう少し緩い形にして毎年1回必ず発行されており、全体会で研究発表もなされる中で、様々な知見の深まりや広がりも出てきております。

こうした学輪IIDAの動きをベースにして様々なプロジェクトが立ち上がってくるのが、このネットワークの特徴の一つではないかと思えます。今でこそエス・バードが産業振興と人材育成の拠点として立ち上がってきているわけですが、当初、旧飯田工業高校の校舎をどのように使ったらいいのか、議論していただいたのも、学輪の先生方でした。そうした中で、この学輪のメンバーであります信州大学が、そこにサテライトキャンパスとして大学院のコー

スを設置していただきました。これからその工学系のコースのみならず、農学系や教育学系の大学院のコースも置かれるようになってきますと、おそらくリニア時代におきまして、このサテライトキャンパスが南信州キャンパスに向けて段々と拡充していく、そういった流れもできていくことが期待されるところでございます。

先ほど、大学の機能についてのお話しもありましたが、学輪IIDAの皆さん方の議論の中からそうしたプロジェクトが実際に立ち上がって、そして産業振興と人材育成の拠点という形で続いている訳です。プロジェクトが立ち上がっていくということにこそ、そのプロセスの一つがあるのではないかと思います。

学輪IIDAの先生方にこのような形でいろいろな議論をしていただくということにこそ、この学輪IIDAの意味があると思うところであります。そこからおそらく、今日も出ていましたが、渡邊先生のああいう形でもう少し何とかやりたいな、あるいは高柳先生の歴史的にやはりこの団体とうまく組みたいな、といったご提言から、また新たなプロジェクトが生まれてくるのではないのでしょうか。

これからも、そうした先生方と地域の皆さん、そして今日は登場しておりませんが、高校生や大学生、大学院生の皆さんも含めて、大きな輪がこれからまた広がっていくことをご期待申し上げます。

きっとリニア・三遠南信道時代におきましても、こうした学輪IIDAのようなネットワークが広がって、そこから様々な知見が出てきて、様々なプロジェクトが立ち上がるようになれば、本当に共創の場の機能が果たされることになるのではないかと思います。

学輪IIDAの10年の歩みというものは決して長いものではなく、まだまだこれからだということを改めて確認させていただいた、そんなスペシャルシンポジウムではなかったかと思います。

本当に皆さんありがとうございました。重ねて御礼を申し上げ、私からのクロージングにあたってのあいさつとさせていただきます。

## [通信欄]

大学連携会議「学輪IIDA」により発行される機関誌「学輪」は、学輪IIDAのメンバーである大学研究者の皆様の発意により、平成26年度に創刊して以降年1回の発刊を重ね、学輪IIDAの取組や大学研究者等による飯田に関する教育・研究活動の実績を蓄積するとともに、その内容を多くの方にご覧いただいております。

学輪IIDA設立10周年を迎える本年は、これまで研究者・学生・地域の皆様とともに取り組んできた活動に加え、より多くの新たな試みが展開されることを期待しておりましたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により、学輪IIDAの取組も様々な影響を受けた1年間となりました。

しかしながら、大学連携会議「学輪IIDA」では、そのような状況下だからこそ、これまで多くの研究者の方の参画により培われてきたネットワークを最大限に生かし、リニア時代を見据えた飯田の未来に関するシンポジウムを3回に分けて開催し、その模様はインターネットを通じて発信いたしました。

シンポジウムの開催にご協力いただき、また、シンポジウムの記録を収録した機関誌特別号である本号の発行にご協力いただきました多くの皆様方に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

学輪IIDAに集まる様々な専門的な知見が機関誌「学輪」により蓄積され、飯田が将来にわたり魅力的な地域でありつづけられるよう、機関誌「学輪」をはじめとする大学連携会議「学輪IIDA」の様々な取組にご理解ご協力いただきますようお願い申し上げます。

## [編集委員]

平岡 和久 (立命館大学政策科学部)  
福島 茂 (名城大学都市情報学部)  
小林 正夫 (東洋大学社会学部)  
廣岡 裕一 (京都外国語大学国際貢献学部)  
上野山裕士 (摂南大学教育イノベーションセンター)  
藤田 武弘 (和歌山大学観光学部)  
藤井 至 (和歌山大学観光学部)

## [編集局]

和歌山大学観光学部  
編集局長 藤田 武弘  
編集局 藤井 至

## [事務局]

飯田市 総合政策部 企画課  
大学・三遠南信連携係

大学連携会議「学輪IIDA」  
機関誌「学輪」  
第8号(特別号) 2020  
(年1回発行) 2021年1月発行

●  
発行

飯 田 市

395-8501 飯田市大久保町2534番地

0265-22-4511

<https://www.city.iida.lg.jp>

●  
印刷所

龍共印刷株式会社